



「宗教的世界観」と
「渦動」イメージ

東京大学大学院 人文社会系研究科
宗教学研究室 鶴岡賀雄

「渦の特徴付け」研究会 於北海道大学

2012.8.6～8

「宗教的世界観」とは（私的定義）

〈この世〉とは質的に異なった、かつ〈この世〉に
価値的に優越する〈あの世〉を想定し、
〈あの世〉との関わりの中で〈この世〉を
価値づける世界観。

「世界」の二重性（ないし多様性）を想定する

「宗教的世界観」と「渦動」

〈この世〉のリアリティとは質的に異なった
〈あの世〉のリアリティを思考し、実践し、了解する
ためには、〈この世〉の（任意の）地点から出発して
〈この世〉の地平を離脱する思考や実践の経路、回路
— 「道」としての宗教 — を想定する必要がある。

「〈この世〉の外」が開かれる特異な地点
— 「世界の果」であり「世界の中心」 — に到達する
という運動性を想定する戦略がしばしば用いられる。

「渦動」 としての世界

「全体を覆いつつ、一点に収斂し別の地平に突出する運動性」として、渦動のイメージが用いられることが多い。

逆に、ある特異な一点から〈この世〉が渦をなして形成されてくるといふ、発生論的世界の構造が想定されることも多い。

このとき「渦動」が「世界」のイメージとなる。

「宗教的世界観」を構築するための言葉 (イメージ言語) と論理の性格

「宗教的世界観」を構築する思考は、
「厳密な」—「学」的—なものではない。
自然言語による曖昧な論理に依拠している。
その説得性は、厳密な学のそれとは異なる原理に
依拠するところが大きい。

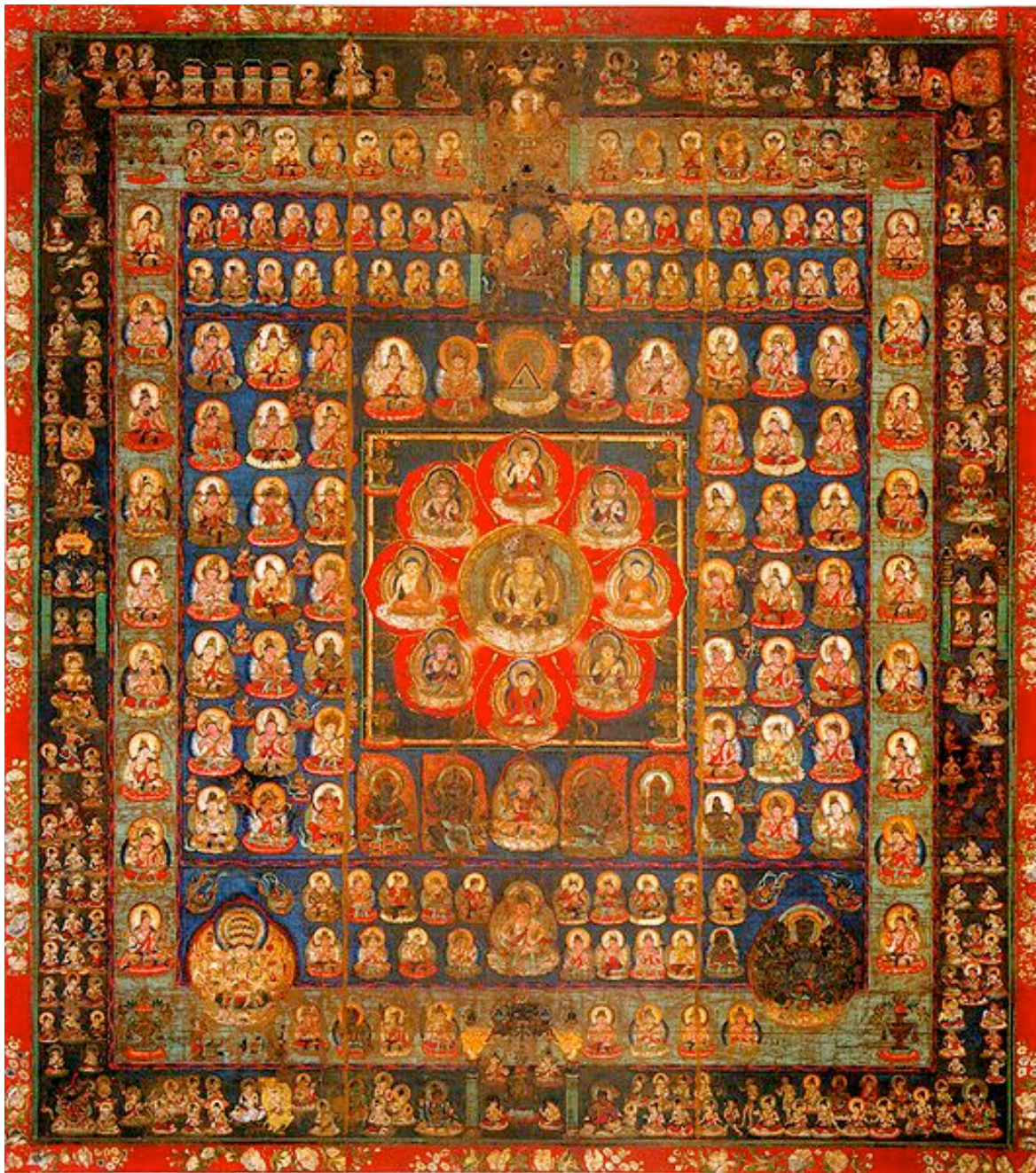
事例 1 . 曼荼羅 (曼陀羅)

maṇḍala

語義：「円状のもの」

意義：「悟りの境地」の

視覚イメージによる表現

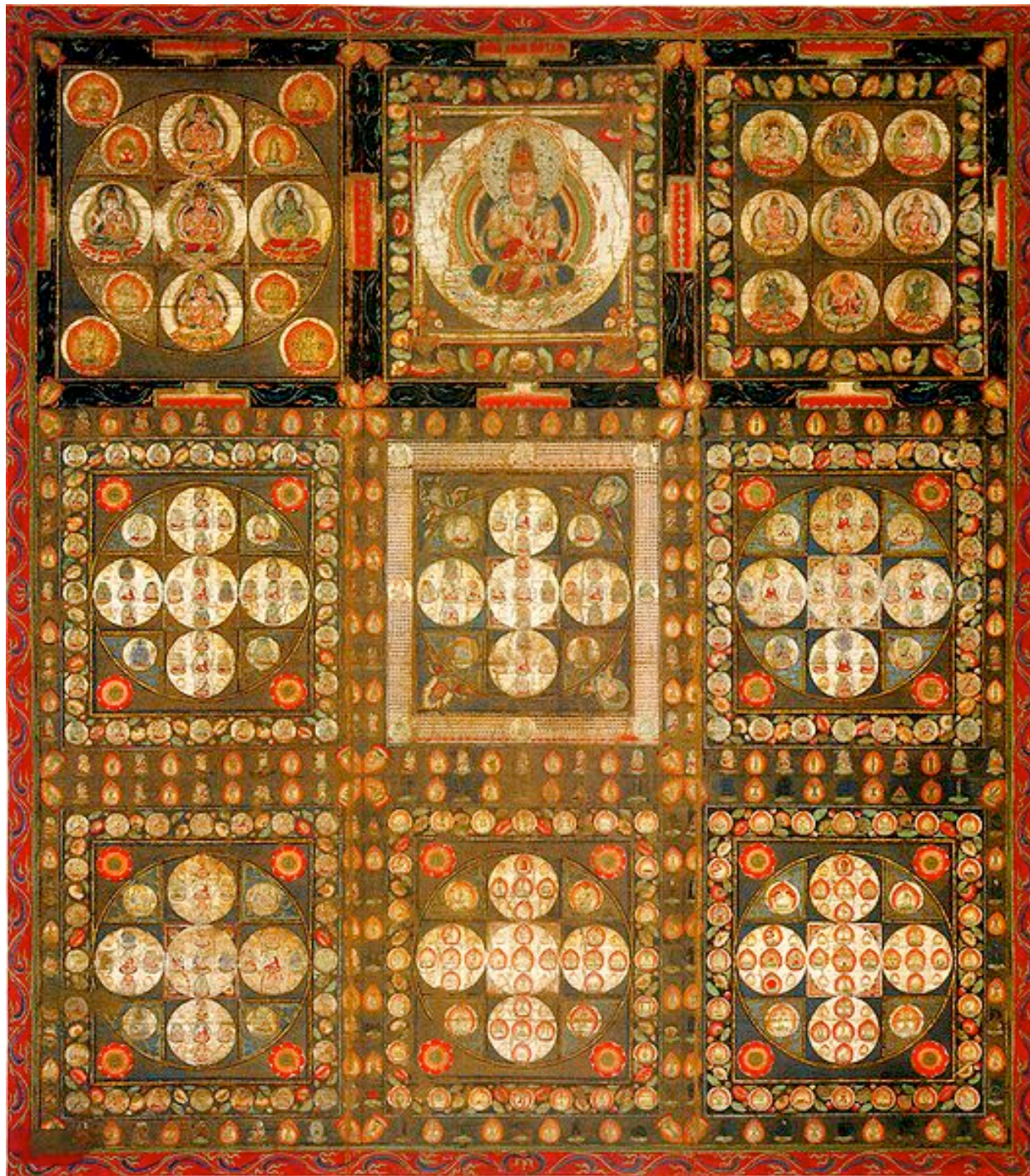


胎藏界曼荼羅

(東寺・平安時代)

胎藏界 (理～主觀)

「上求菩提
下化衆生」：
「渦動」的



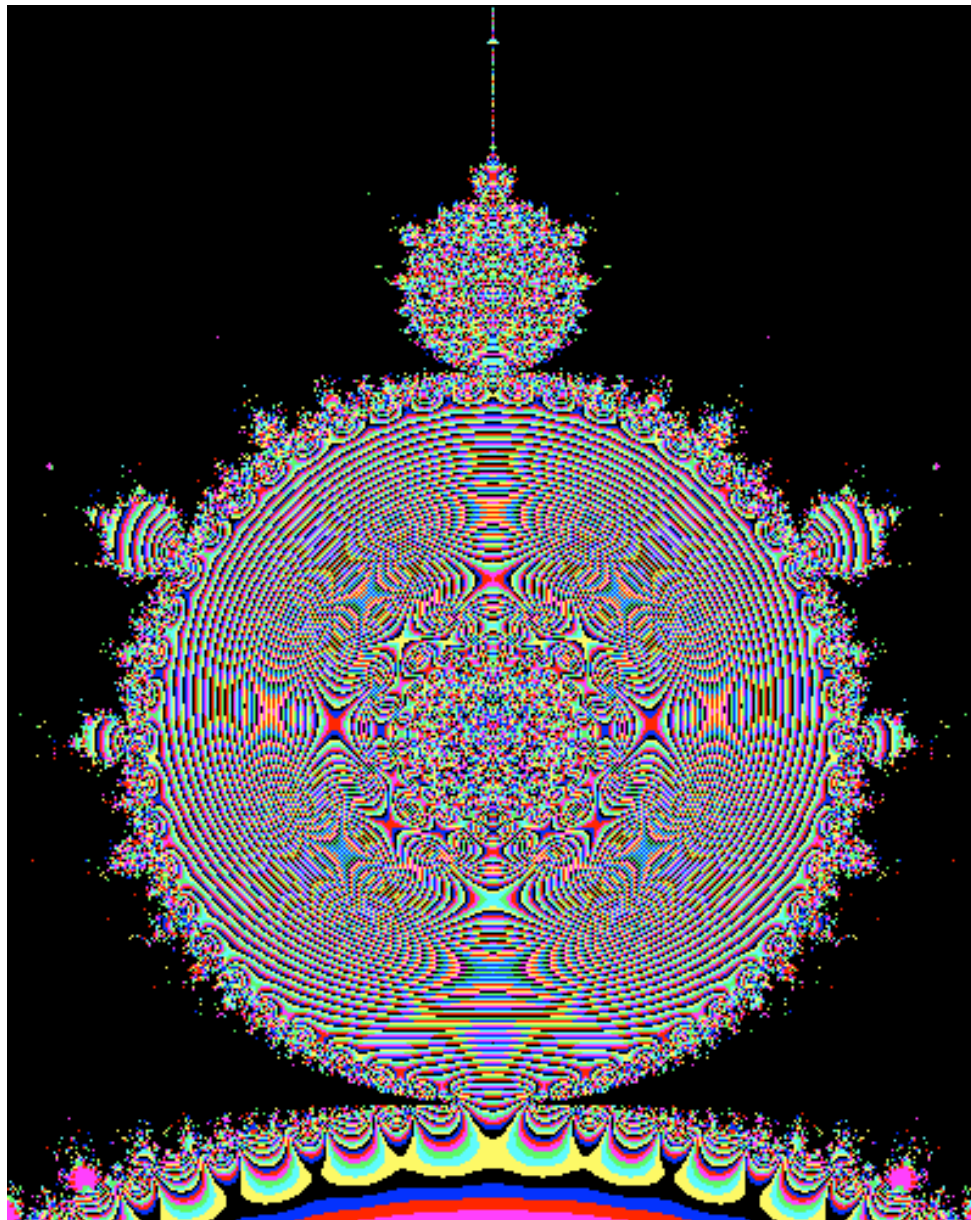
金剛界曼荼羅
(東寺・平安時代)

金剛界
(智～客觀)

現代チベット仏教 の曼荼羅



現代数学との「野合」 マンデルブロー集合とマンダラ



$$Z_{n+1} = Z_n^2 + C$$

初期値0のzに z^2+c を100回代入した時の値を基に、 $150/|z|$ を色付けすると、外側では泡状(渦巻)の模様が薄れて同心円状の模様が目立つようになる。

大日如来を思わせる
模様.....?

http://homepage3.nifty.com/y_sugi/index.htm

事例 2.

「世界の中心」のシンボリズム

Mircea Eliade (1907-1986)



ボロブドゥール遺跡 (インドネシア)



ヒンドゥー教

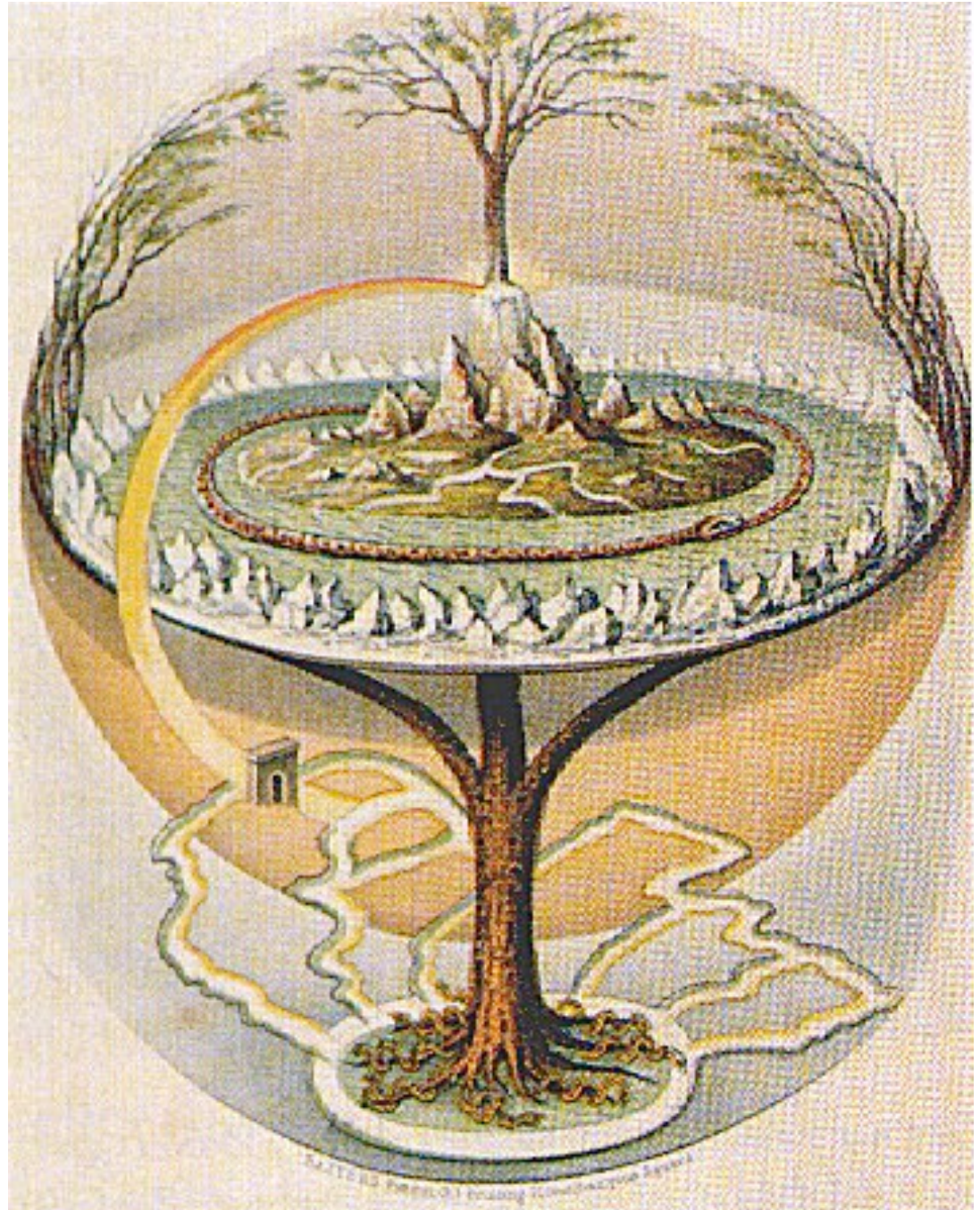
北欧・ゲルマン宗教

Snorra Edda より

イグドラジル

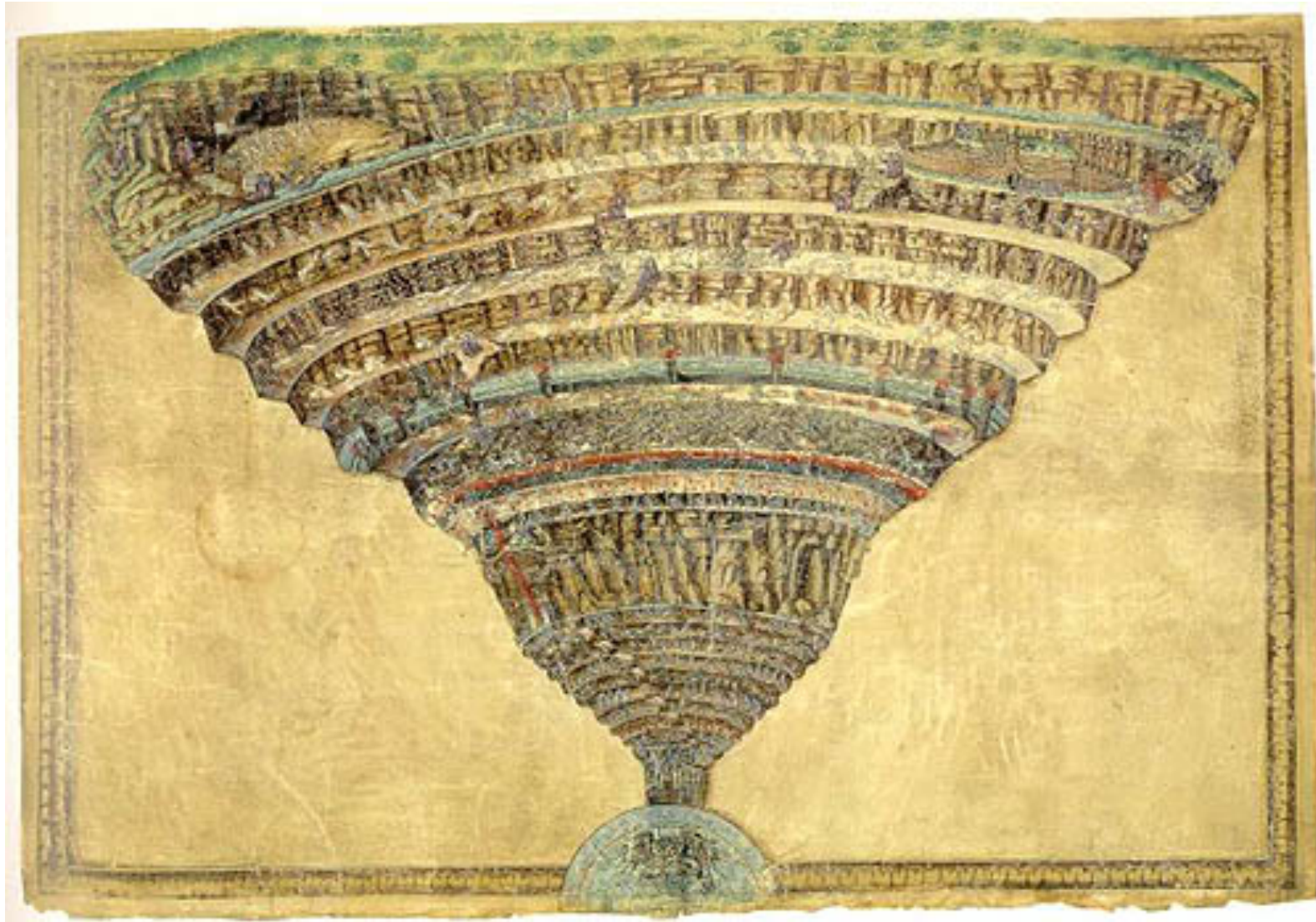
(宇宙樹＝世界軸)

(18世紀)



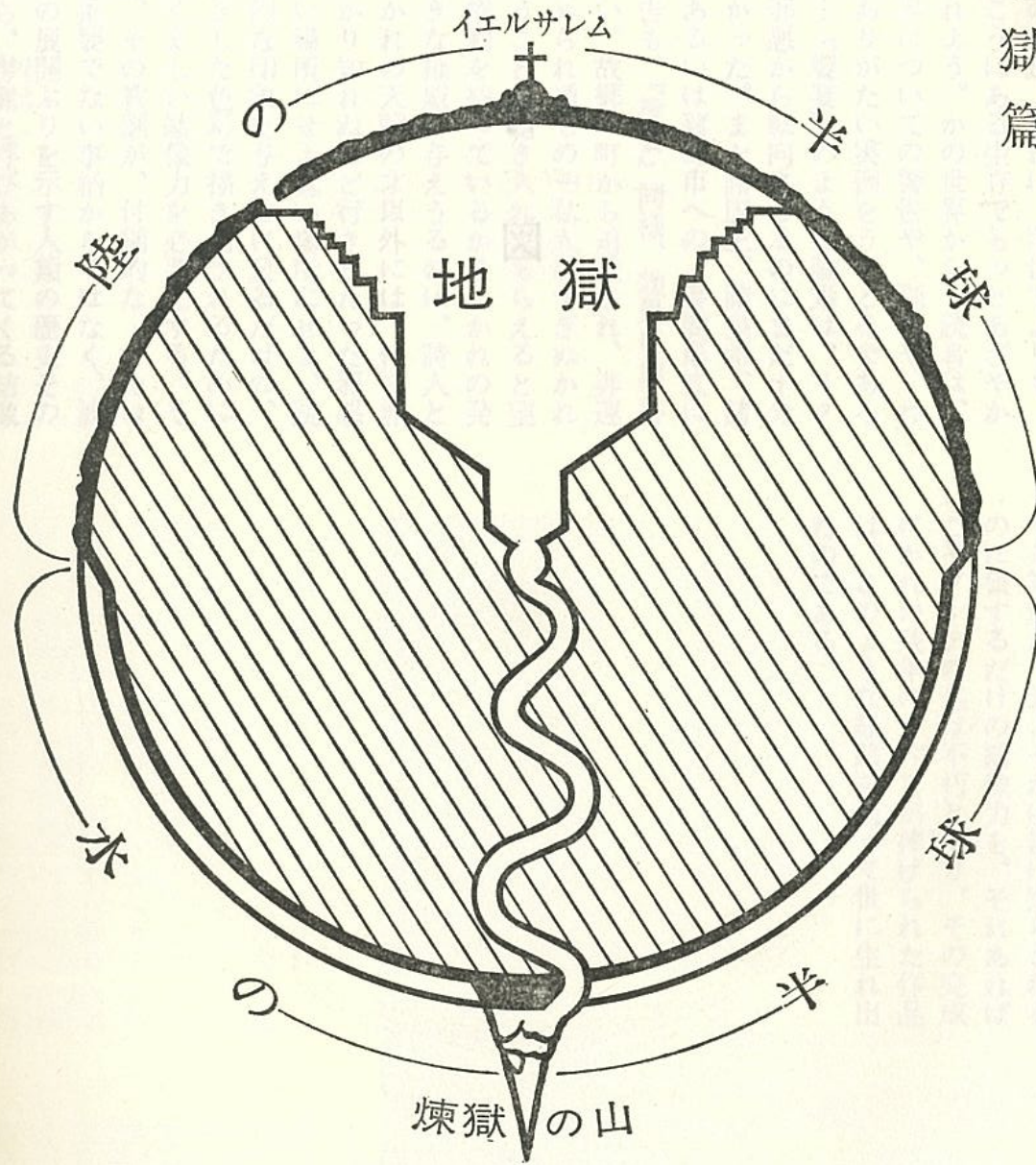
事例 3. ダンテ (1265-1321) 『神曲』のコスモロジー





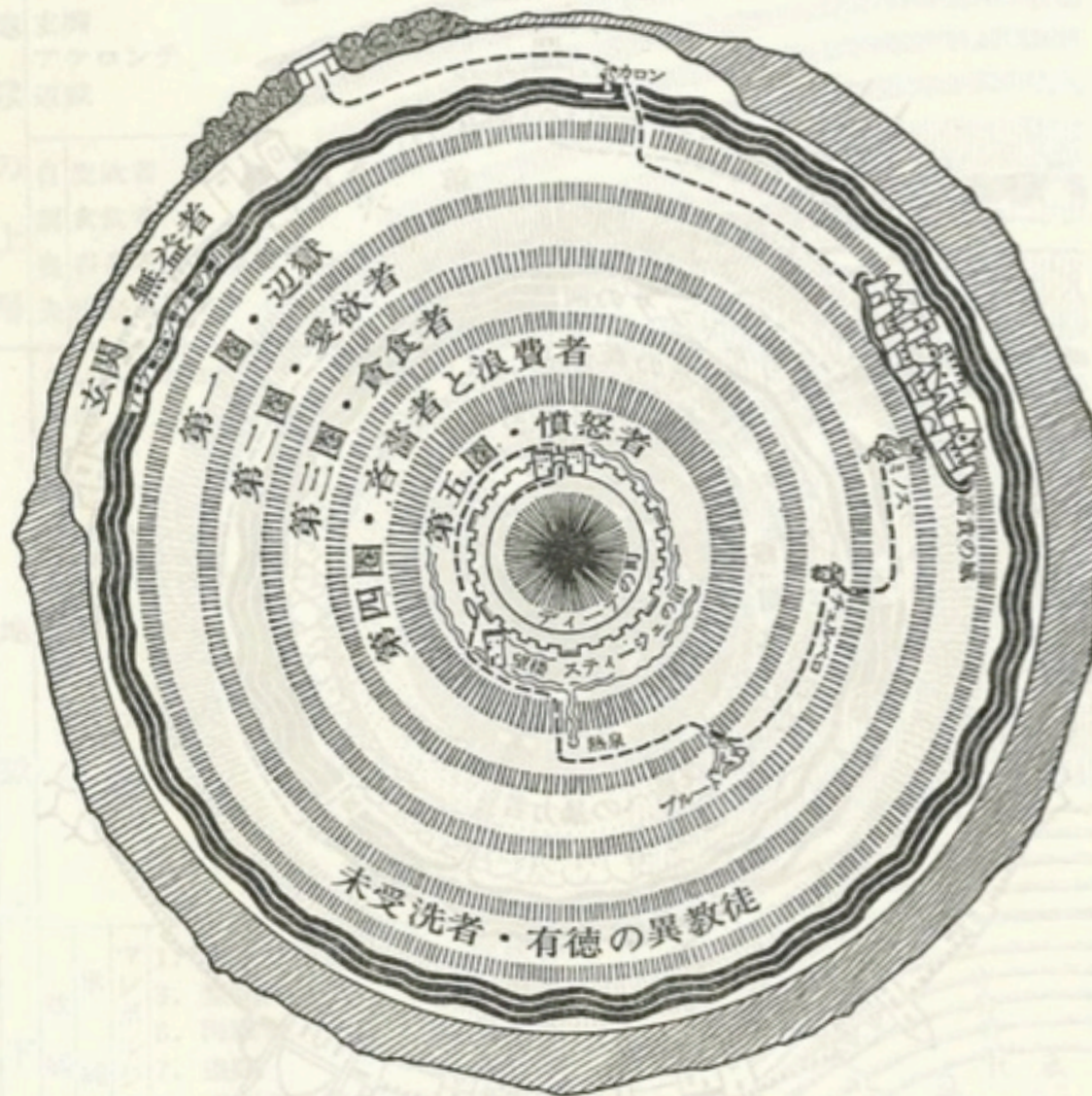
ボッティチェリによる『地獄編』挿画（16世紀）

地獄篇



第1図

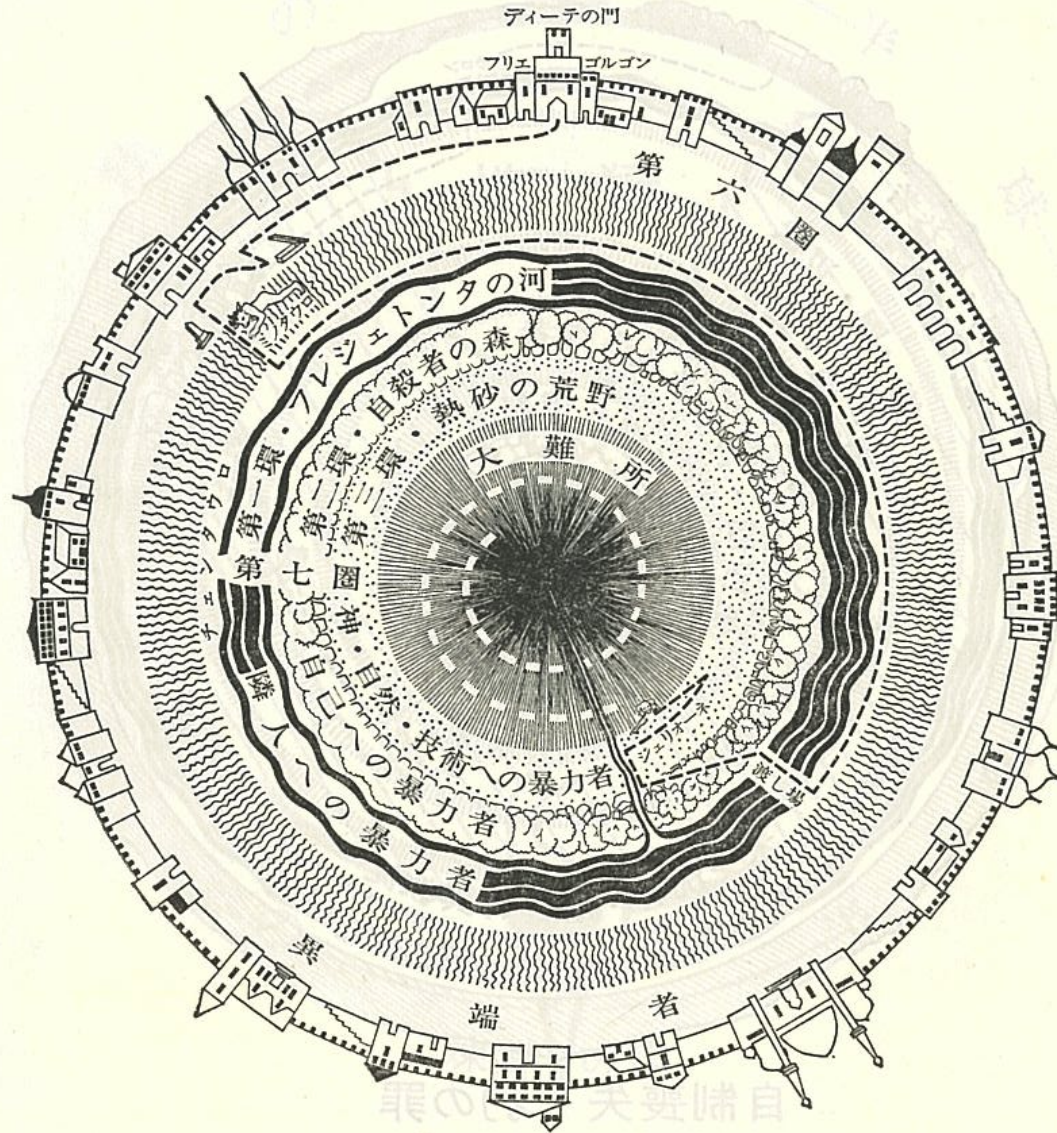
地獄の上層



自制喪失・豹の罪

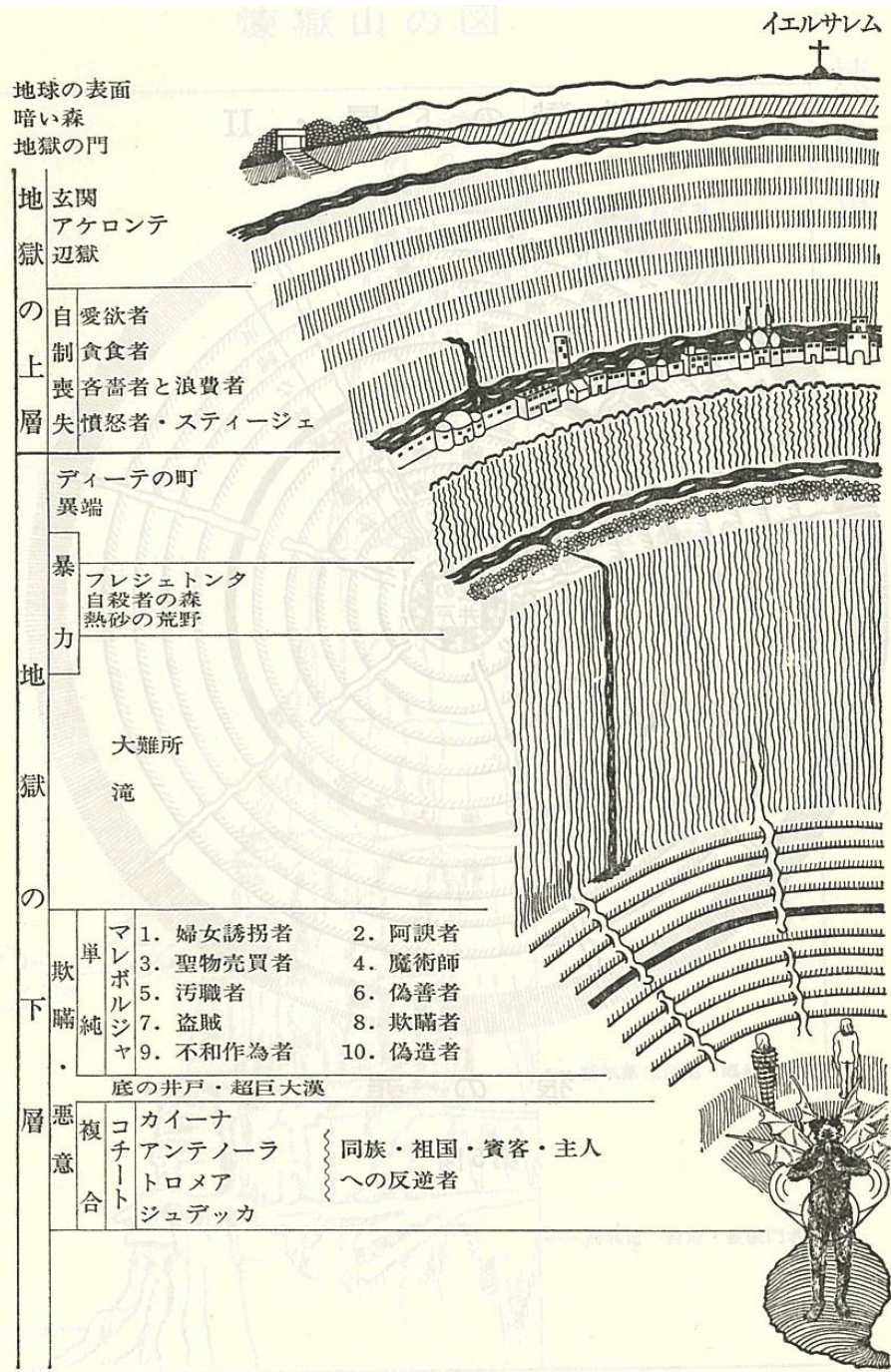
第2図

地獄の下層・I



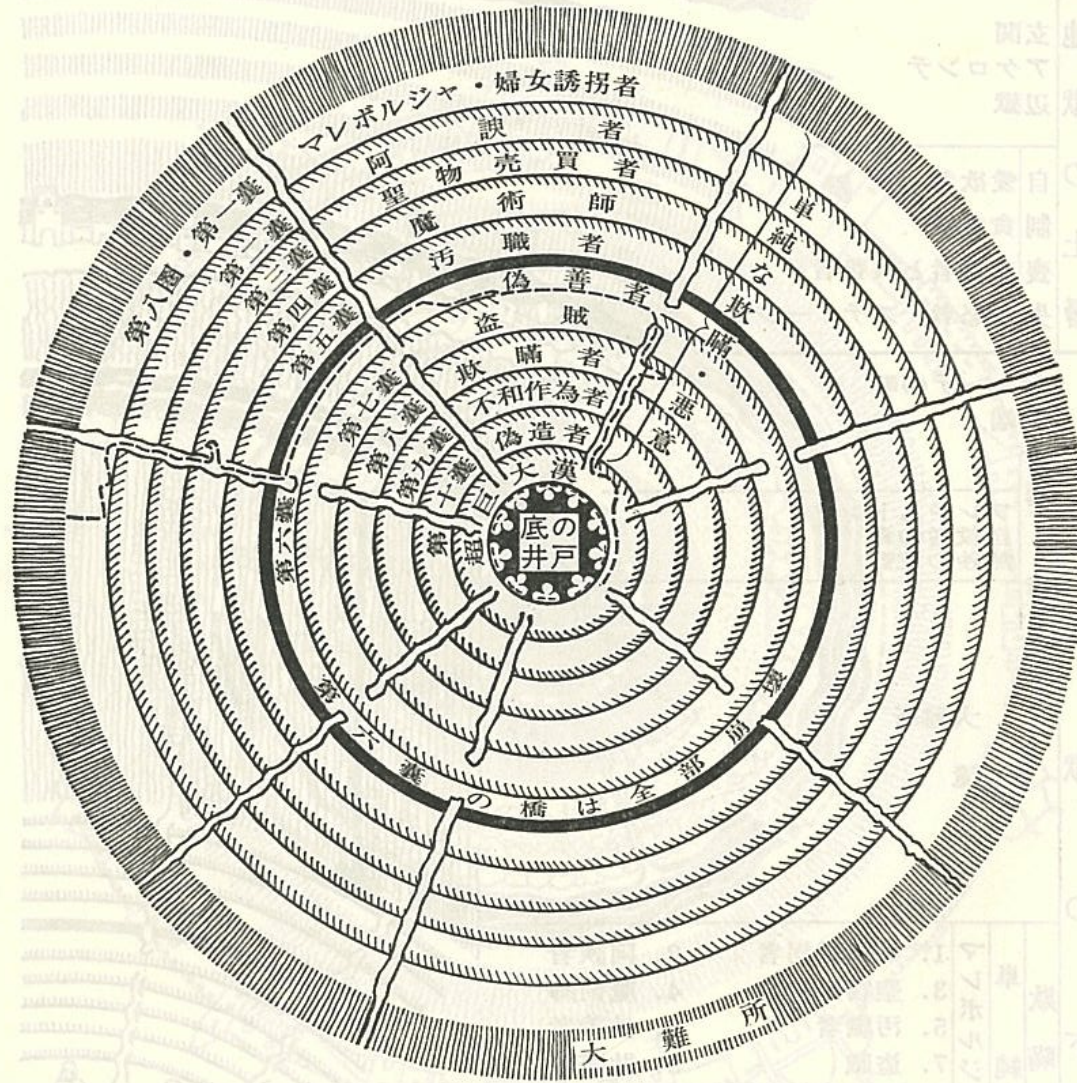
異端と暴力・獅子の罪

第3図



第4図

地獄の下層・II

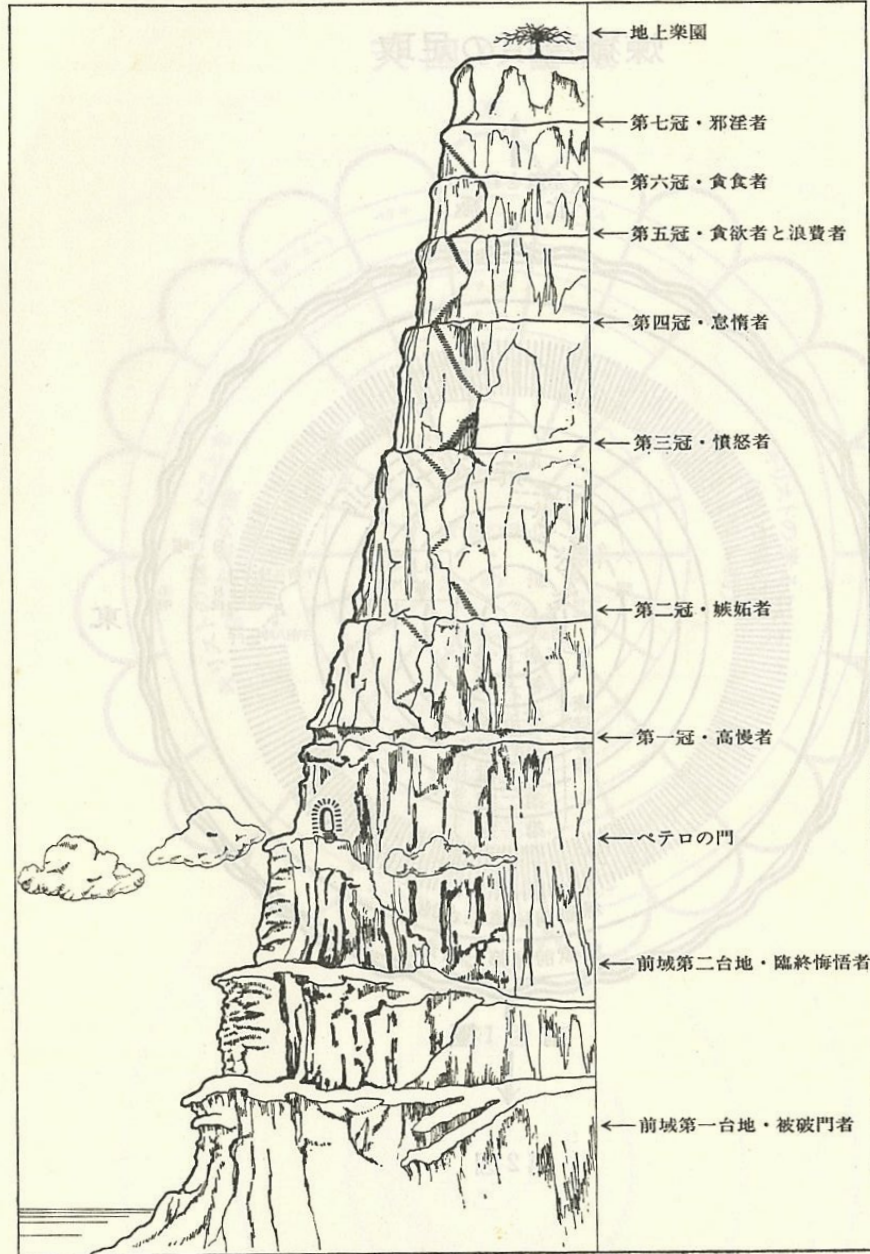


狼の罪

第5図

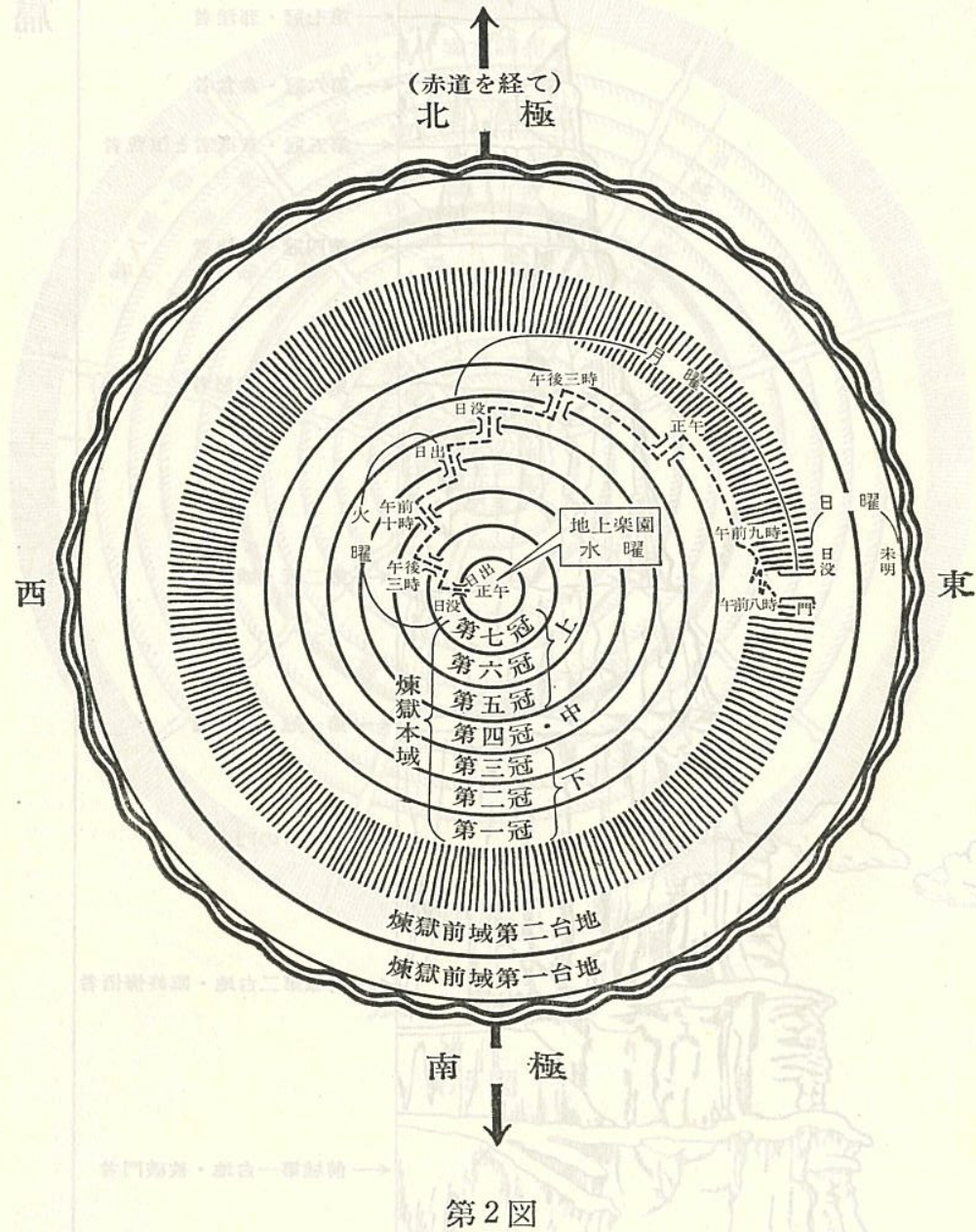
煉獄山の図

煉獄篇



第1図

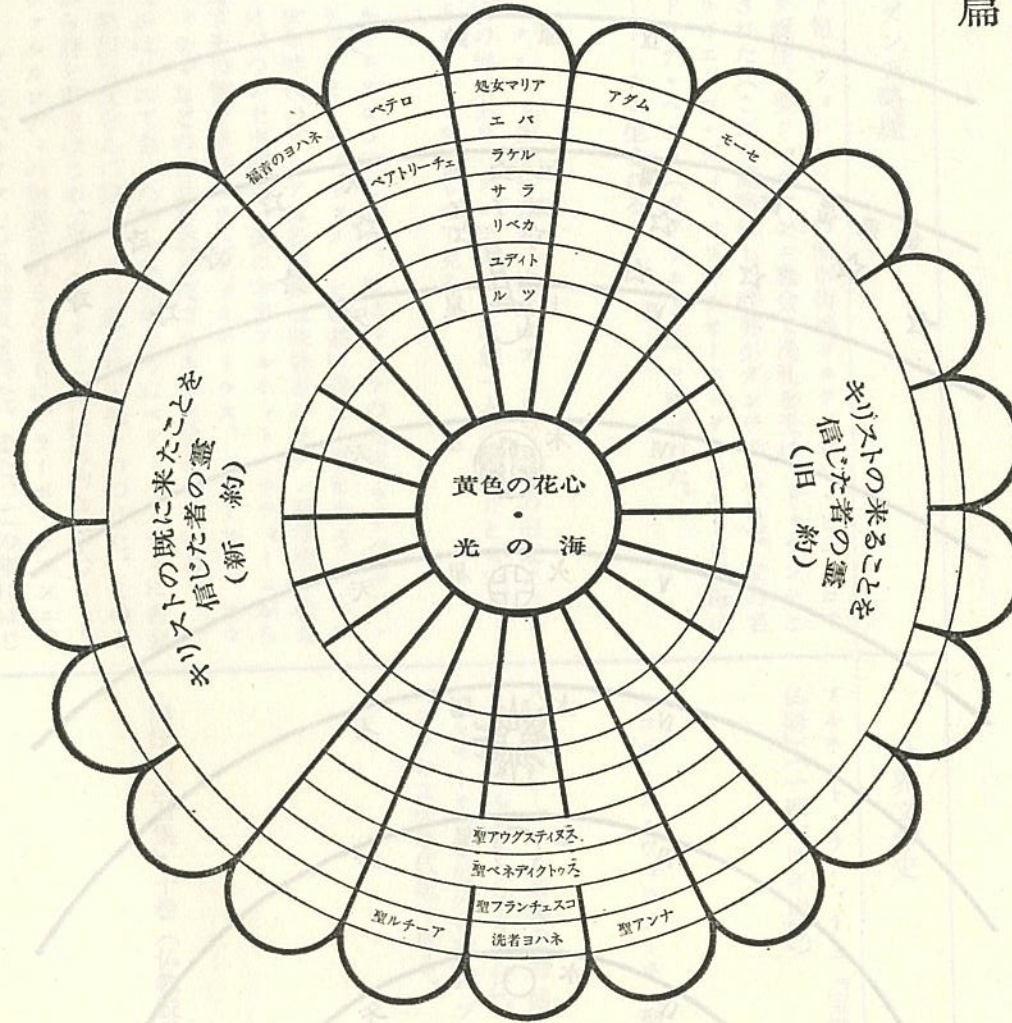
煉獄登頂の足取



天国の薔薇

東

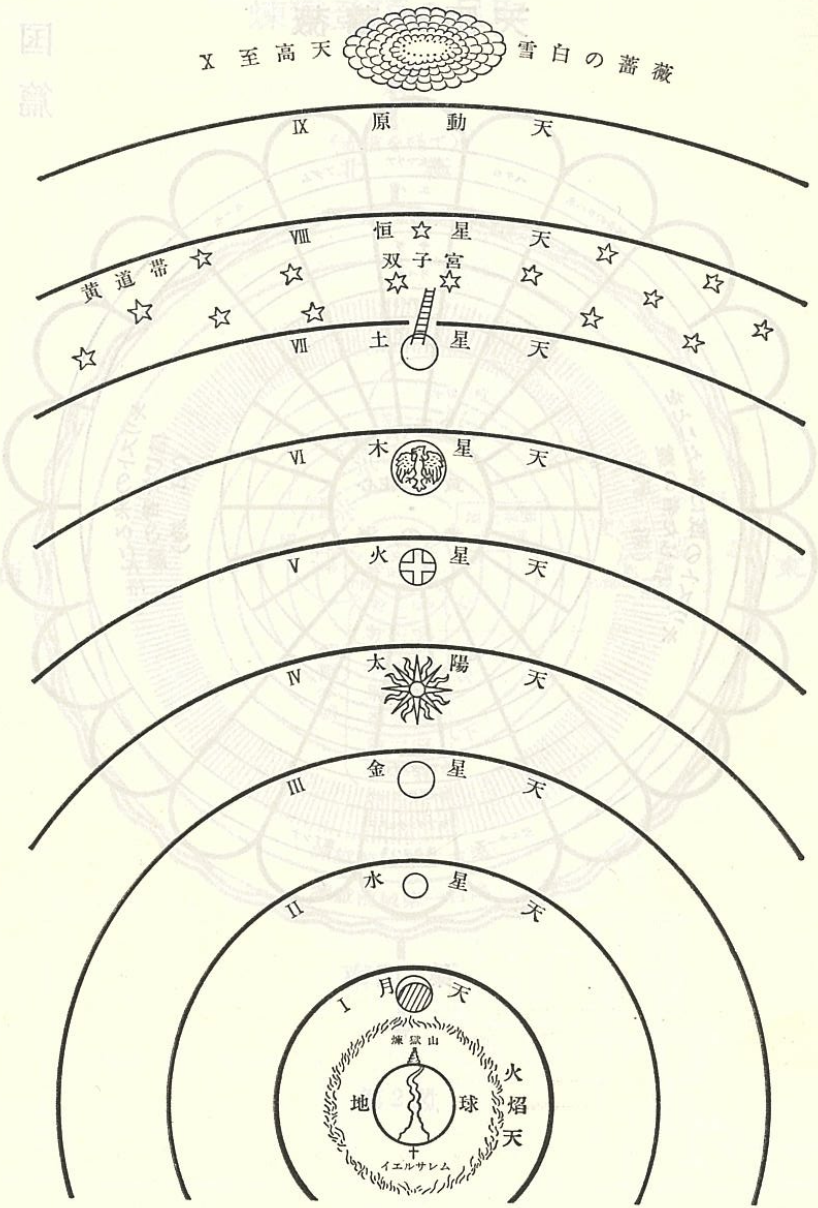
天国篇



第1図

天国の概観

天国
獄



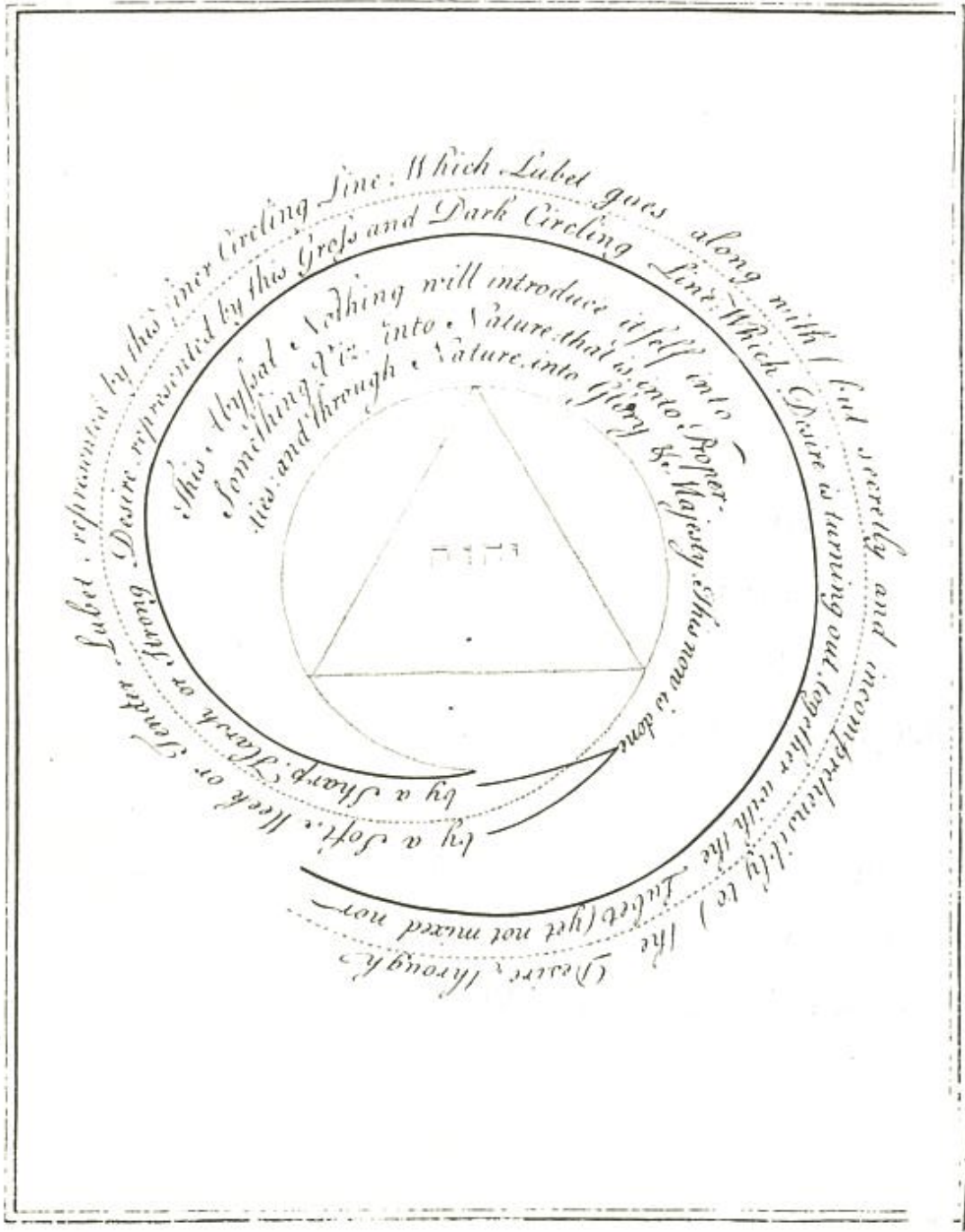
第2図

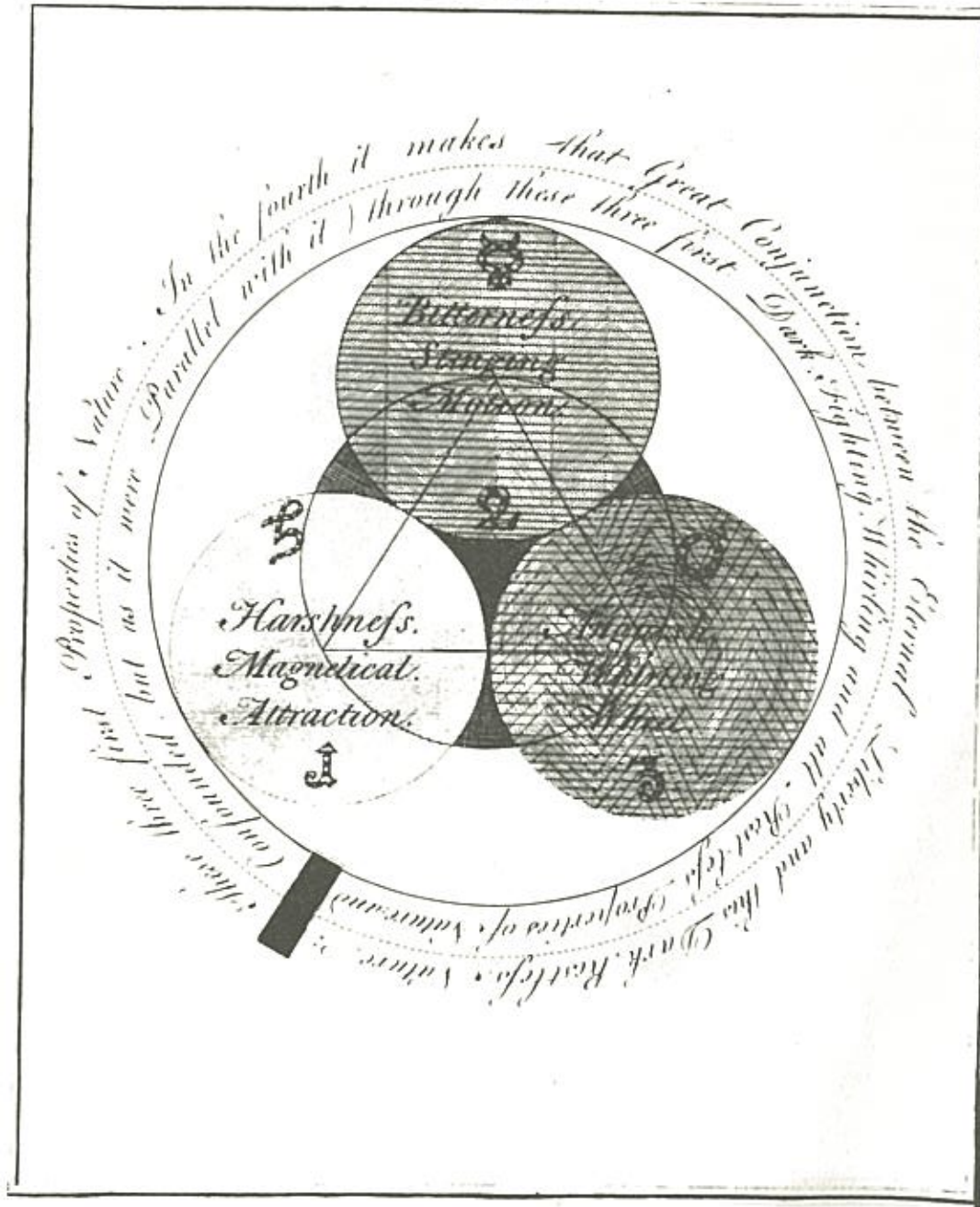
事例4. 「稲妻発火」 ベーム (1576-1624) から バーダー (1765-1841) まで

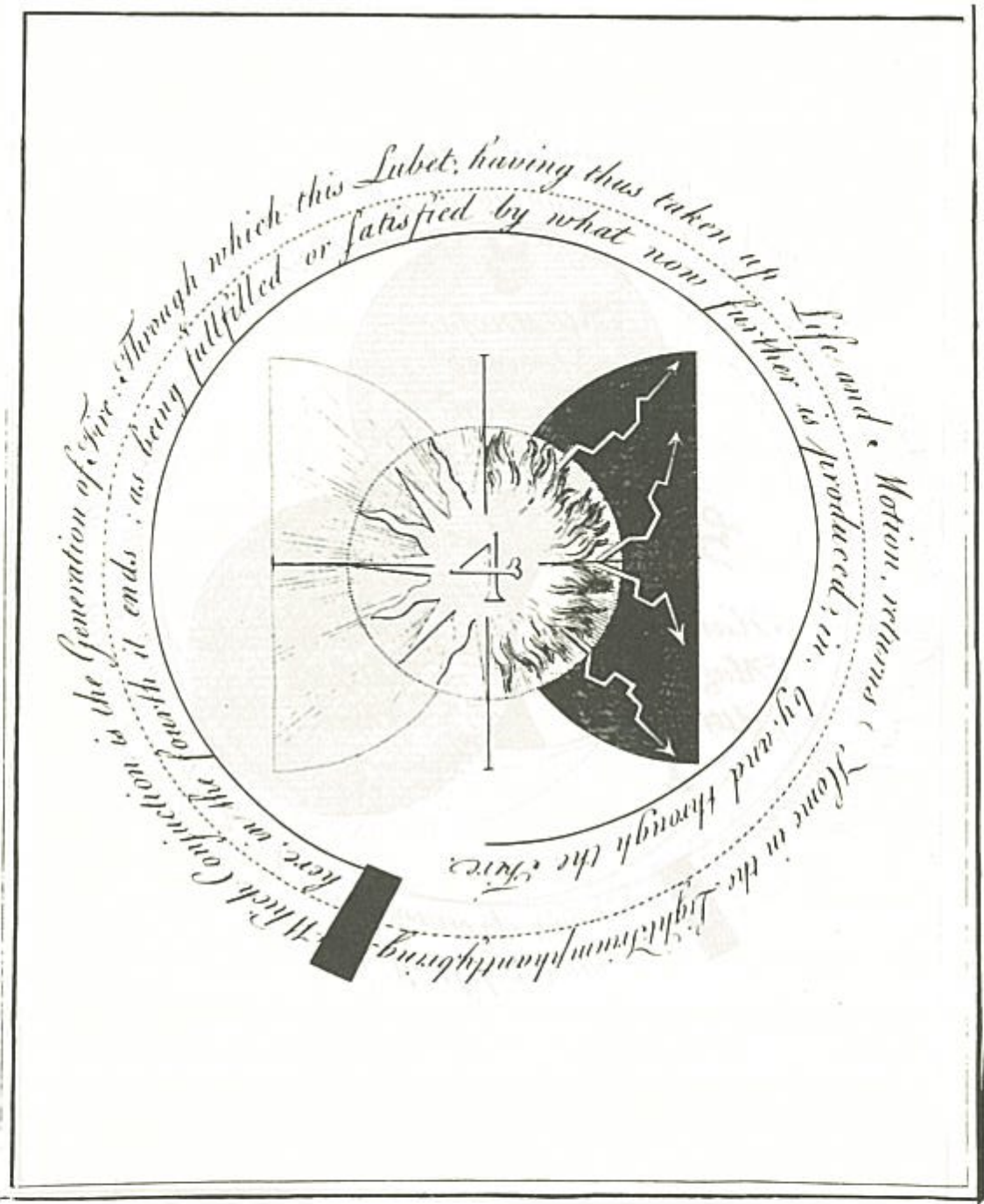


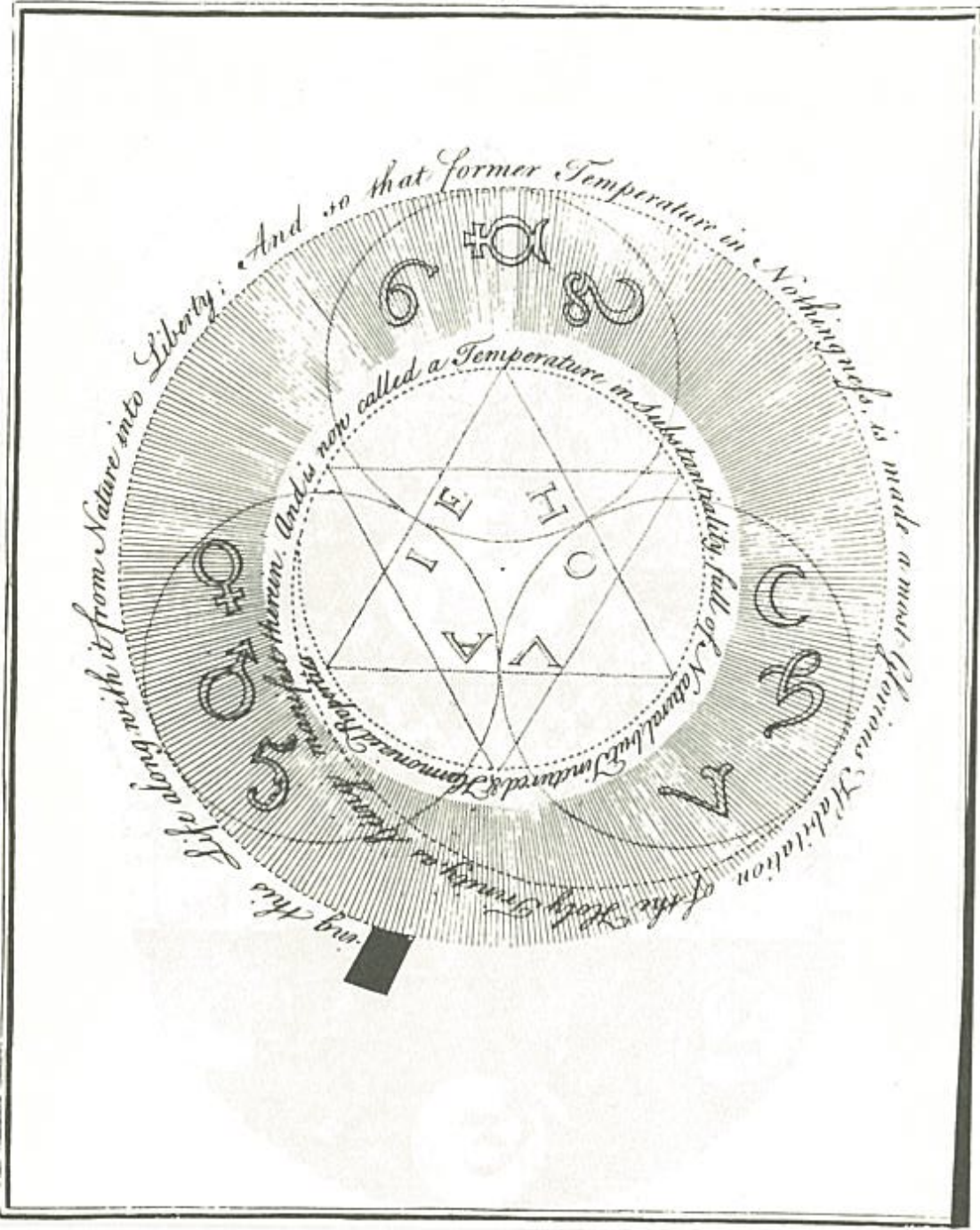
文理分離以前の思考 =
「こころ・精神」と
「もの・からだ」を
同時に思考する試み

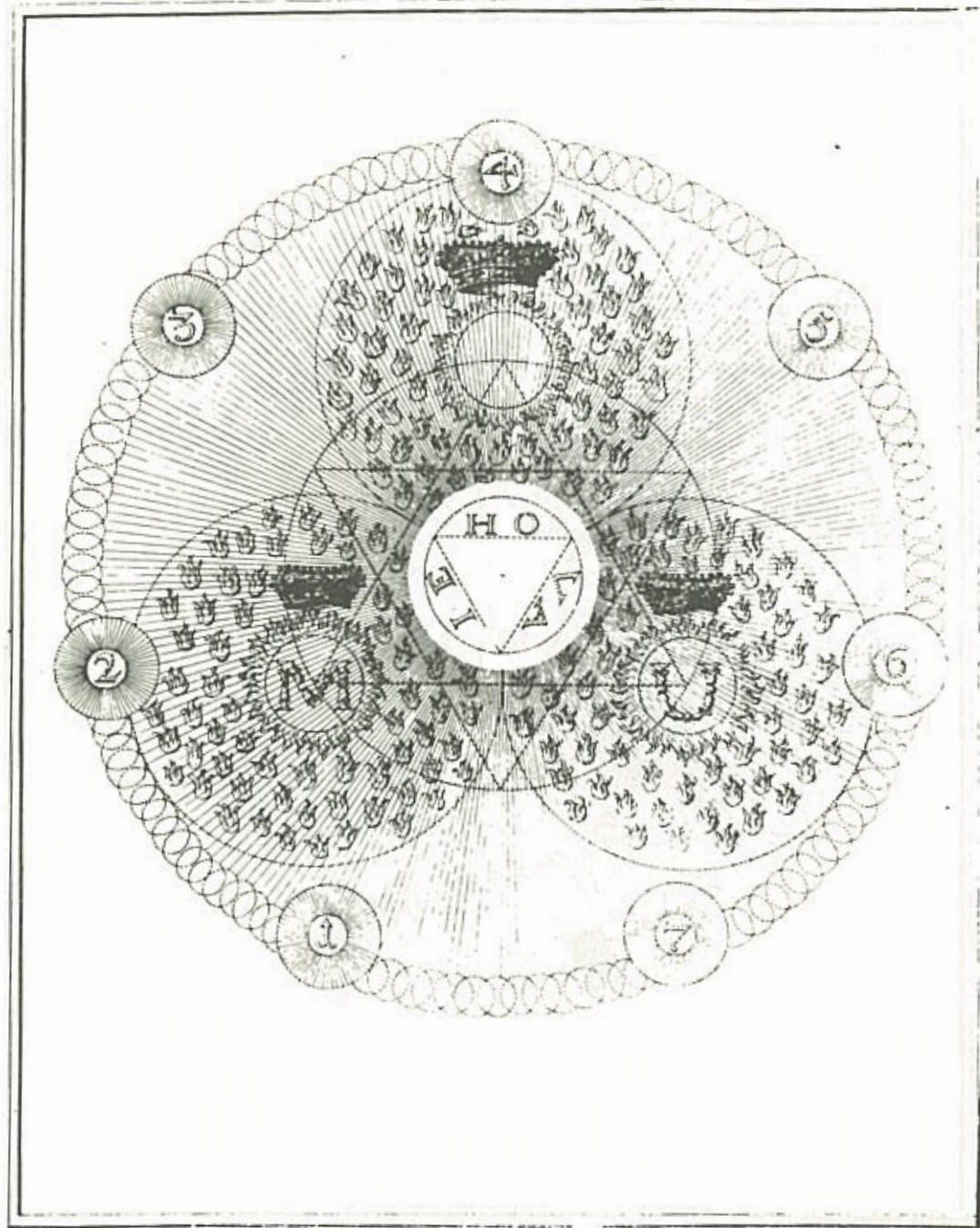


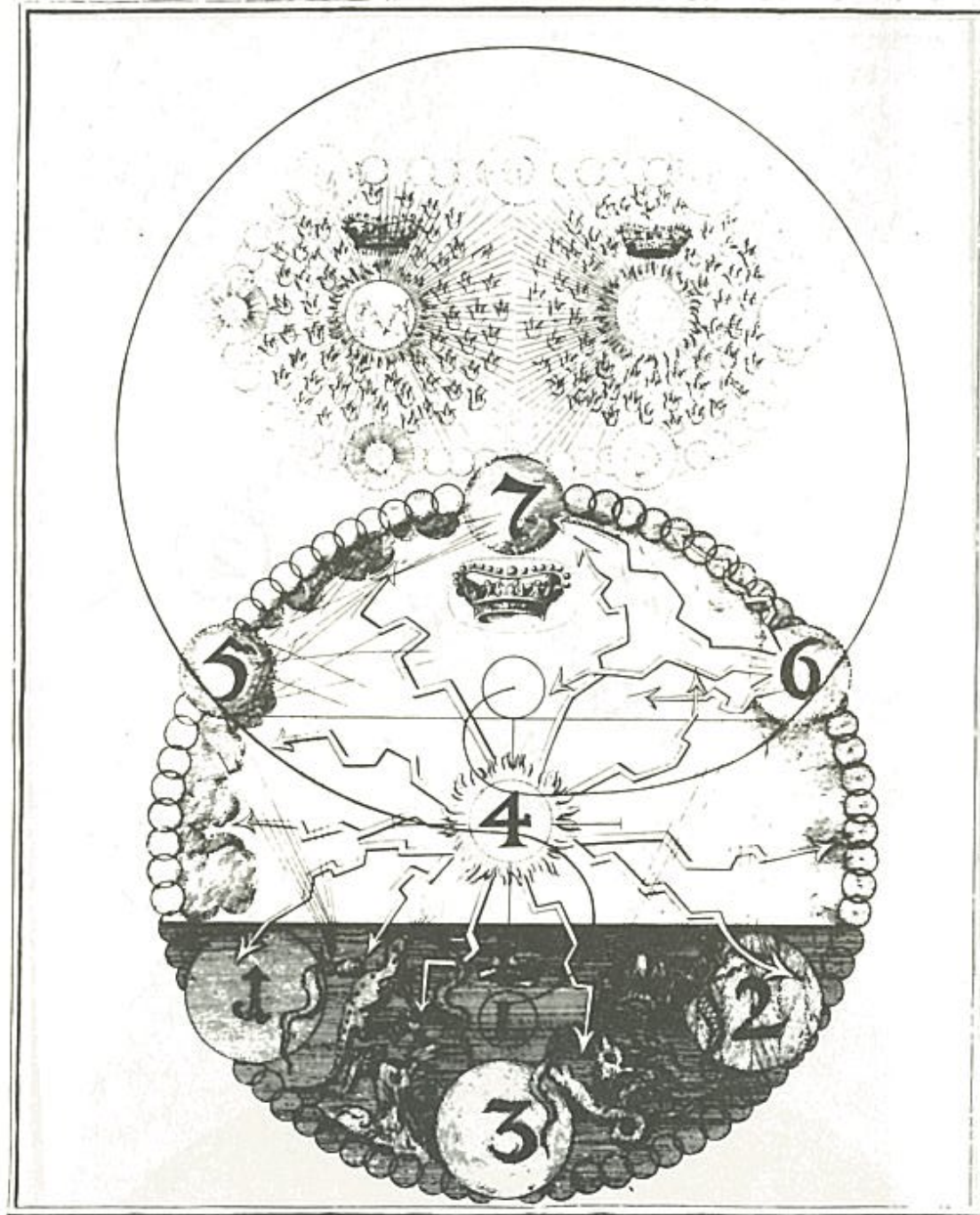












「渦」イメージの特質・魅力
： 「世界」の構造のメタファーとしての渦

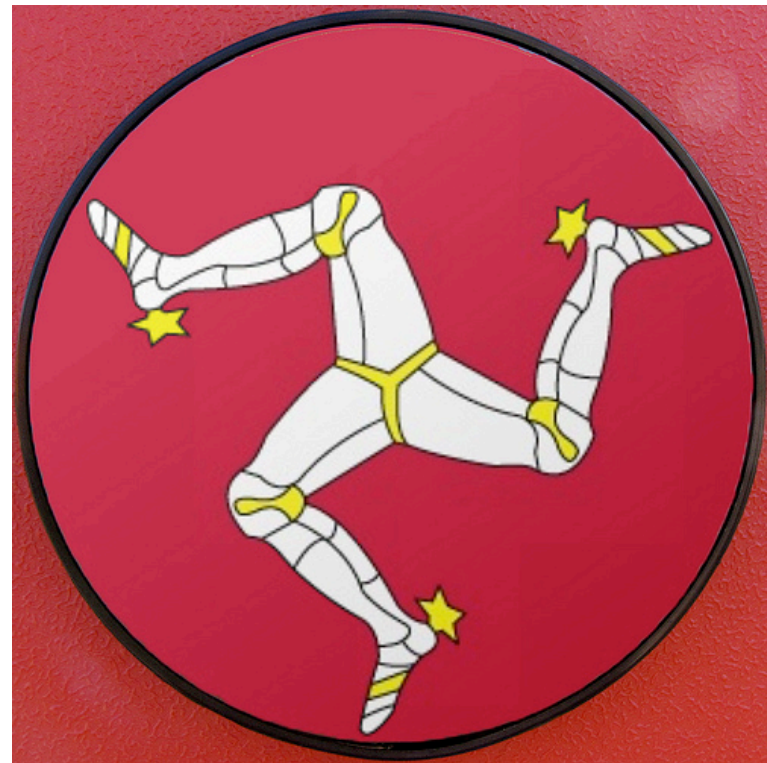
- ・ 「円」（としての〈この世〉）の全体を覆う
- ・ だんだん「密度」が濃くなる
- ・ 極点に達する
(極点で「別の次元／地平／世界」に開ける)
- ・ 逆回転が可能
- ・ 運動性をもつ
- ・ 「場」が運動に抵抗する
(中心への／からの直進を妨げる)

現代の渦的イメージと宗教性

東京大学大学院人文社会系研究科
宗教学宗教史学研究室 博士課程 中島和歌子
wnakajima@mbi.nifty.com

「渦の特徴付け」研究会 於北海道大学
2012.08.06～08

1. トリスケル (Triskell 三本脚) について



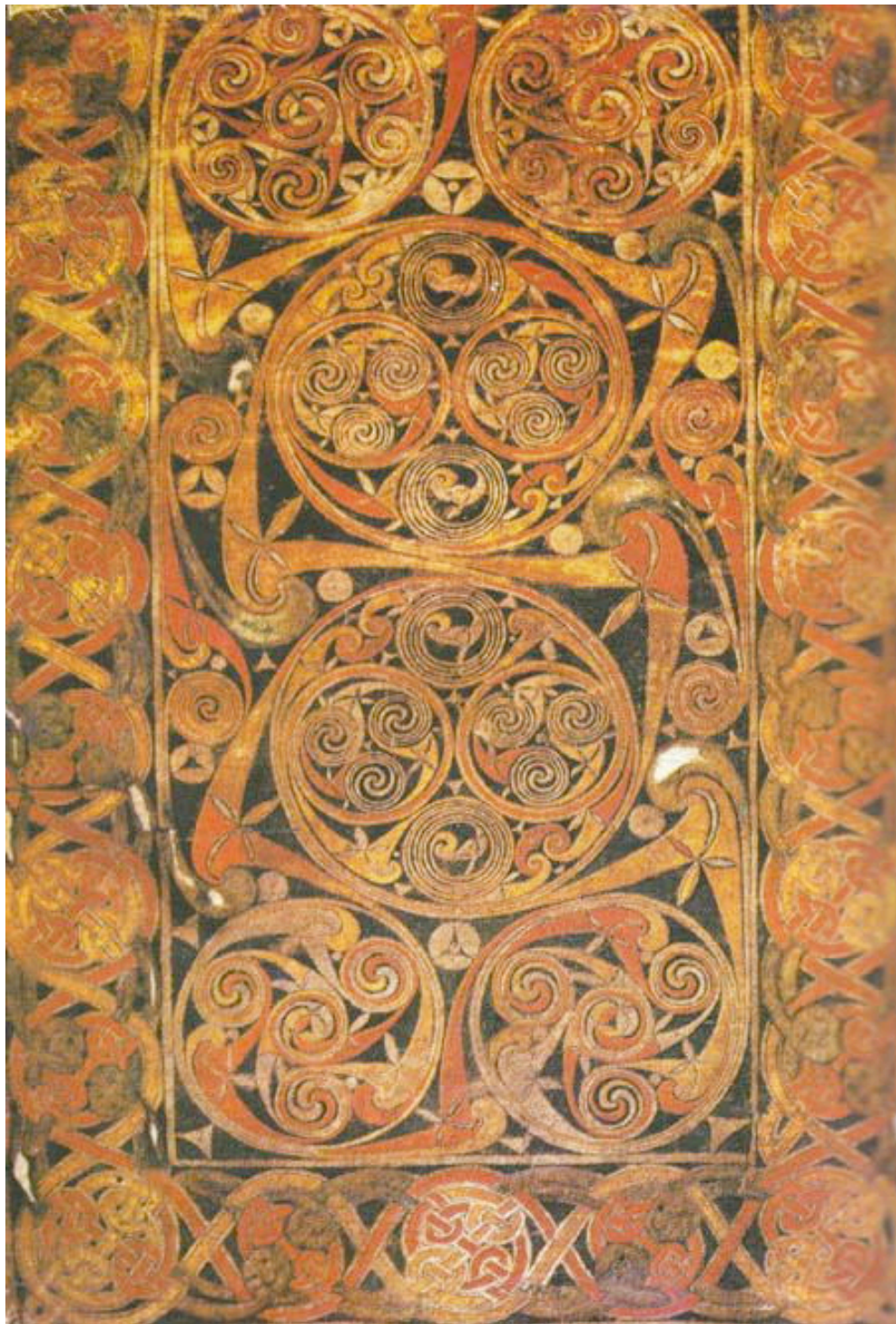
(シチリア、マン島)

ケルト的図像のトリスケル Triskell

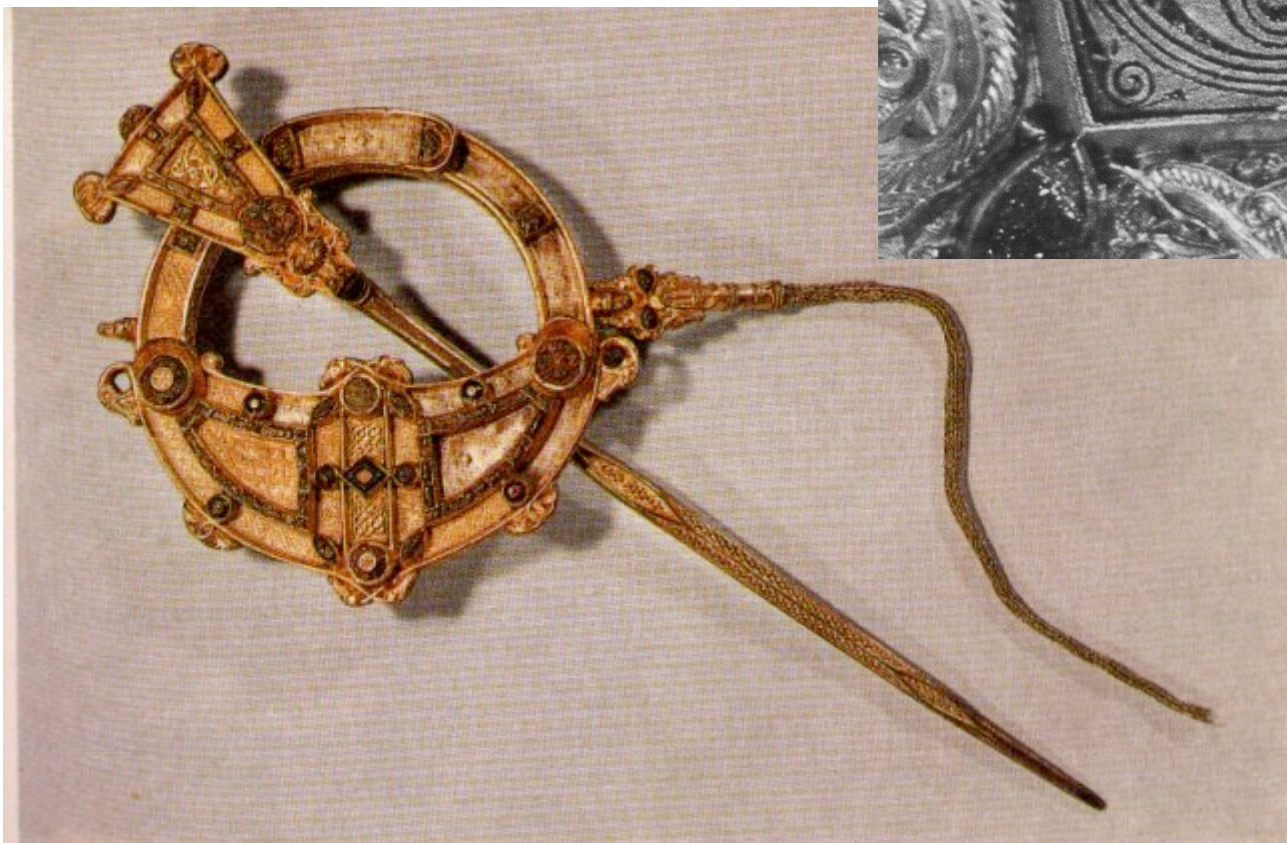
- ・ 古代～中世、アイルランドやブリテン島などのケルト文化圏で装飾に使用
- ・ 古代ケルト人の宗教（ドルイド教）や死生観と関連している？
- ・ 生・死・再生の象徴？



装飾写本
「ダロウの書」
(7世紀)



「タラ・ブローチ」
アイルランド国宝
8世紀



ケルト文化の影響を指摘できる地域



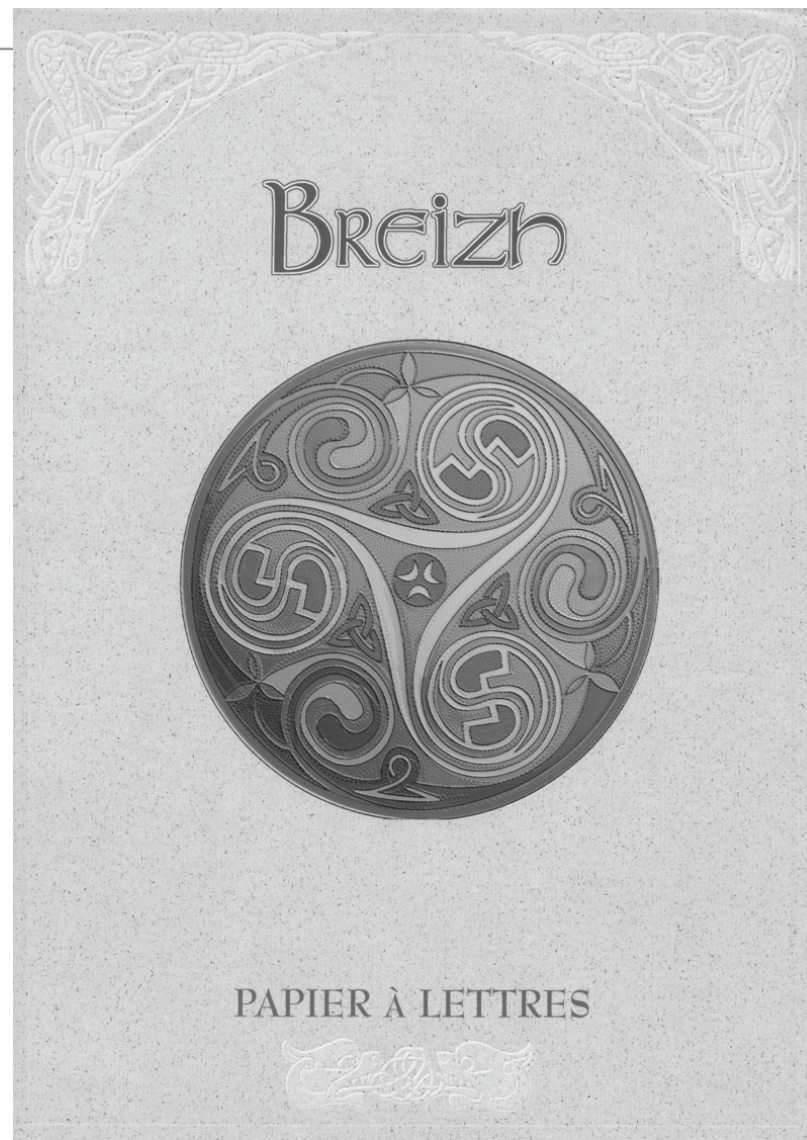
ブルターニュ
フランスの
北西部にある地方



土産物の例 ステッカー



土産物の例





(1997)

素朴な疑問

- ・ブルターニュには、トリスケルがあしらわれた文化財は伝えられていない。
- ・トリスケルはケルト文化圏の紋様であり、ブルターニュはケルト起源の地域である。
- ・だが、トリスケルはブルターニュのもの？
古くからある伝統的な図像なのか？

Divi Kervellaの指摘

ブルターニュにおいてトリスケルが普及したのは
第一次・第二次大戦間からのことであり、
民族主義運動の団体がシンボルとして使用し始
めてからである

Cf. E. Hobsbawm, *The Invention of Tradition*

(1983)

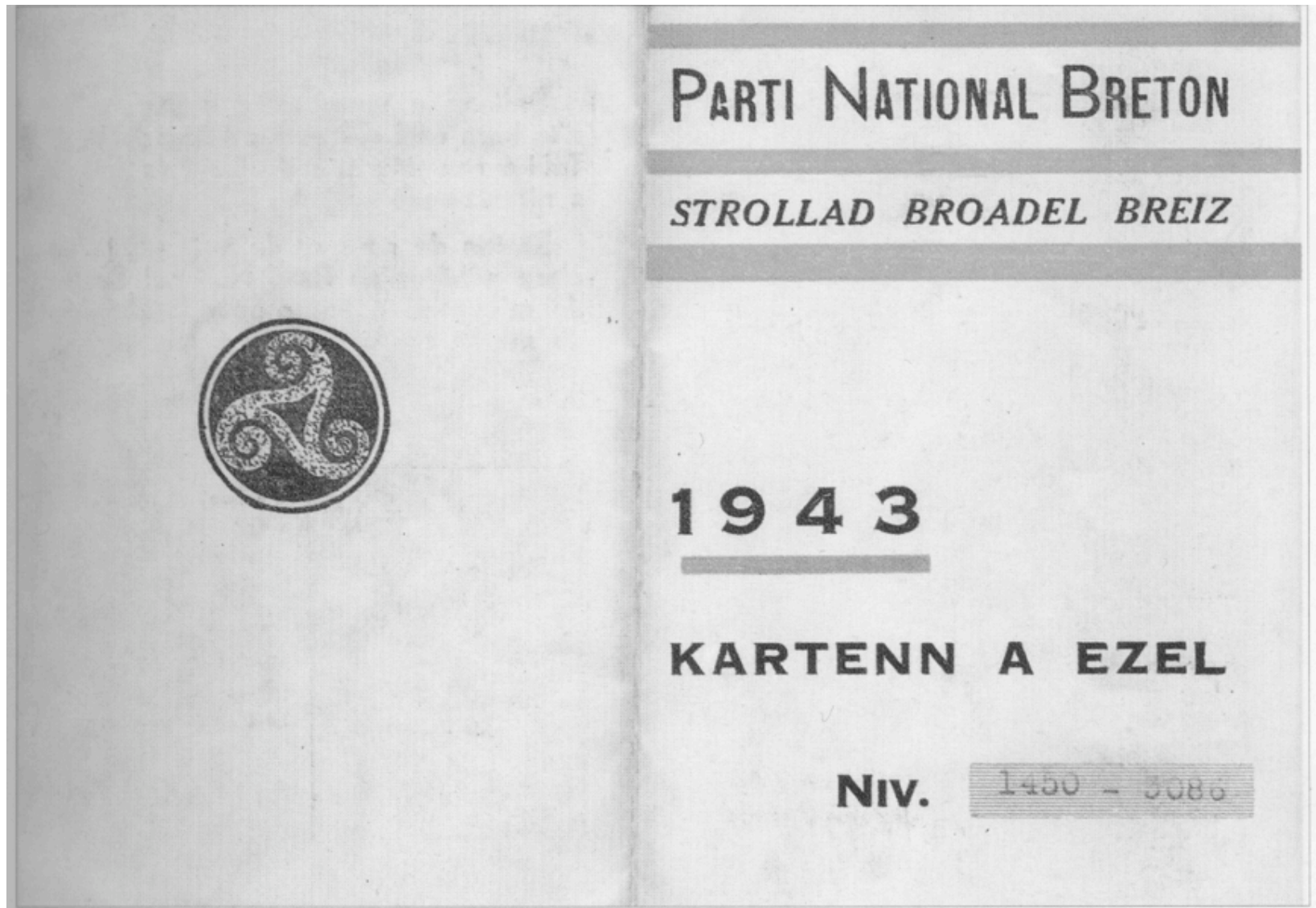
20世紀初頭のブルターニュ

- ・ブルトン語の存続に危機感が抱かれる
- ・ケルト民族の選民思想を基盤とした民族主義運動の出現（フランスからの分離独立さえもめざす）
- ・結果的には失敗 → 現代まで細々と存続

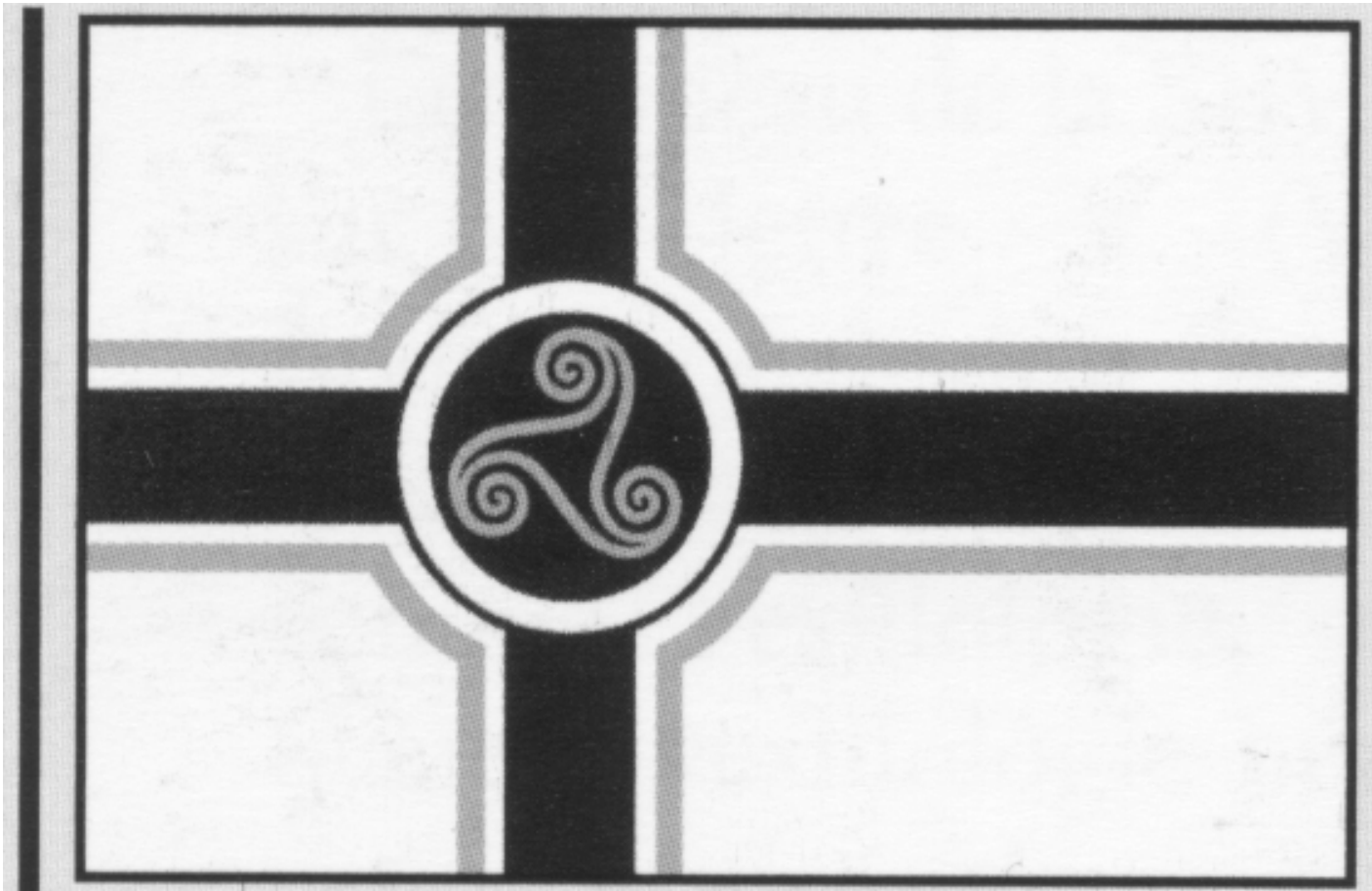
Parti National Breton (ブルターニュ民族党)

- ・ケルト起源の民族性を重要視する
- ・指導者Olier Mordrelの方針
「ケルト的な、古い不思議なシンボルの中から党の徽章を選択する」
- ・トリスケルの採用（借用/受容）による民族意識の発揚効果を期待したと思われる

PNB 党員証



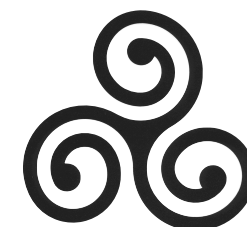
PNB 旗 (1941)



PNBと同時期には、異教的集団

「クレーデン・ゲルティエック（ケルト信仰）」
が結成されており、この流れを汲むドルイド教的な
団体（本部がブルターニュ・1980年以降創立）は
シンボルとしてトリスケルを重視する傾向にある

ドルイド教的な要素（火・水・土・風）が、
今日のブルターニュにおける特徴的な
トリスケル解釈（火・水・土）に
影響を与えている可能性



「ネオ・ドルイディズム」は
ネオ・ペイガニズム (Neo Paganism) の一種。
キリスト教以前の宗教性・信仰・精神性を
復興させようという試み。

pagan : (キリスト教からみた) 異教

2. 迷宮 (Labyrinth) について

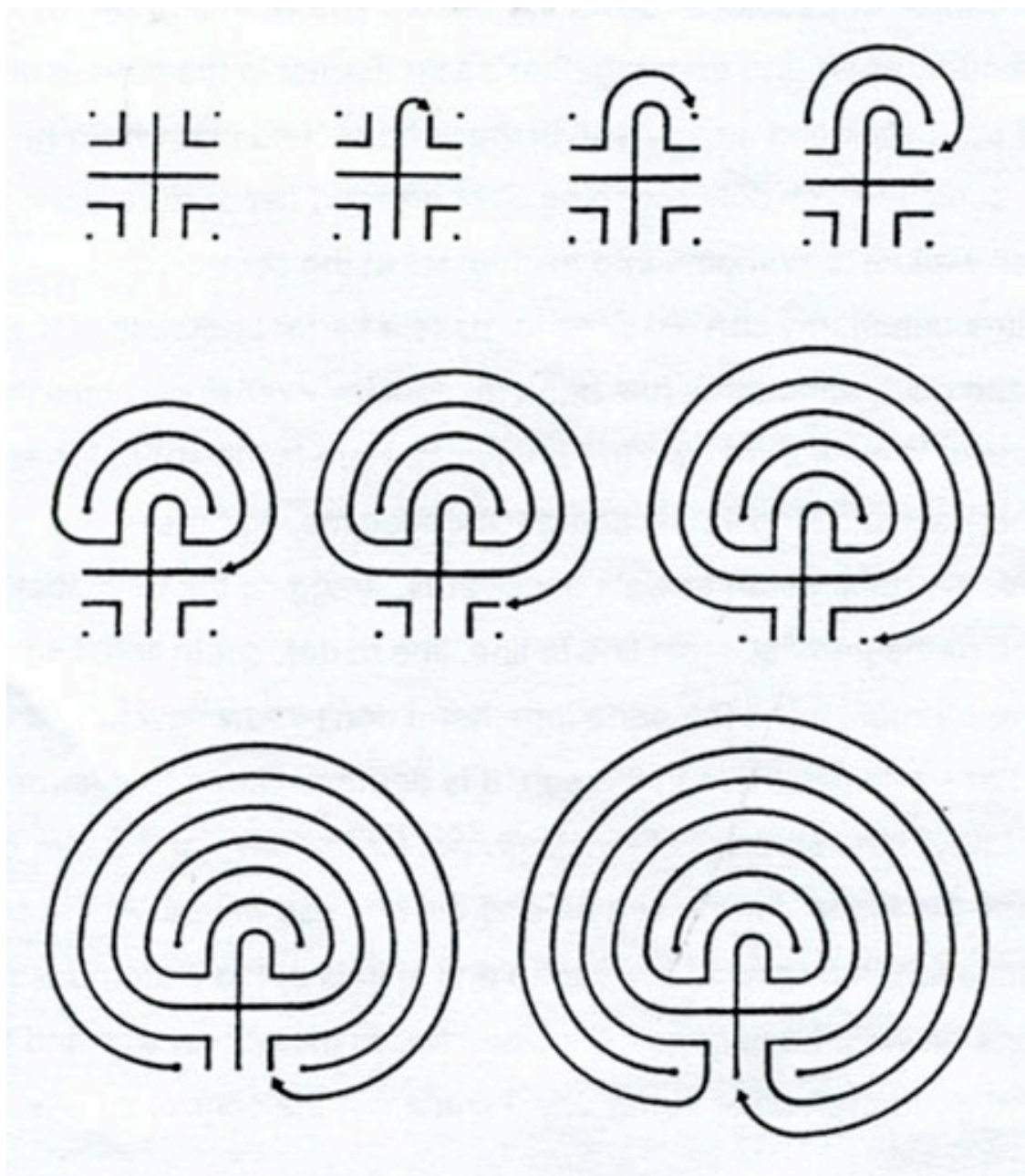


地中海・スカンジナビアから
西ヨーロッパに広まる
最古のものは1200B.C.
(ペロポネソス半島)

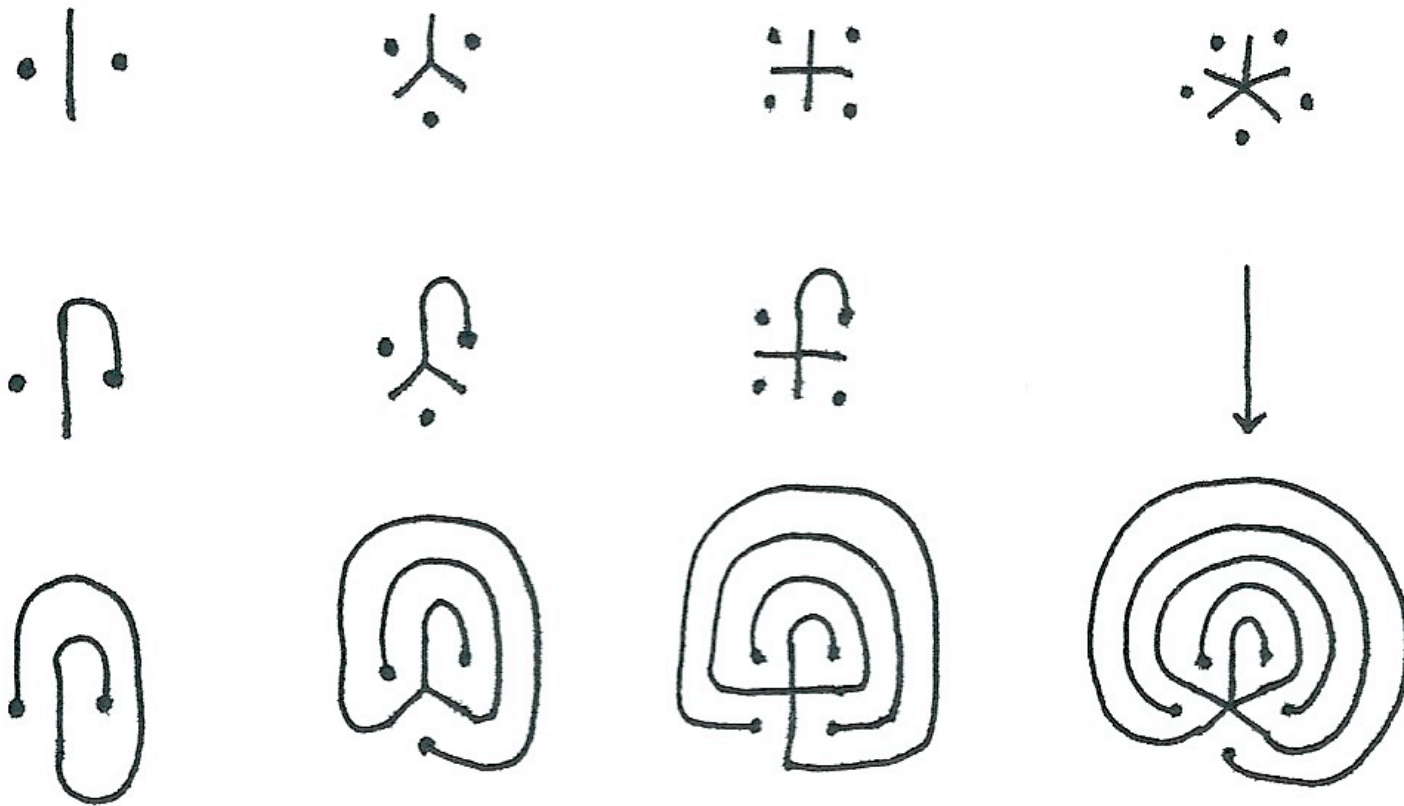
迷宮のかたちの特徴

- ・ 分岐路がなく一本道
(選択を迫られず、
道に迷うことはない)
- ・ 入り口は出口を兼ねる

「クレタ型」迷宮
の描き方



迷宮の描き方 (バリエーション)



迷宮はどのような意味と関係しているのか？

通過儀礼、死と再生、靈魂の生まれ変わり
母なる大地の子宮、惑星や太陽の動き

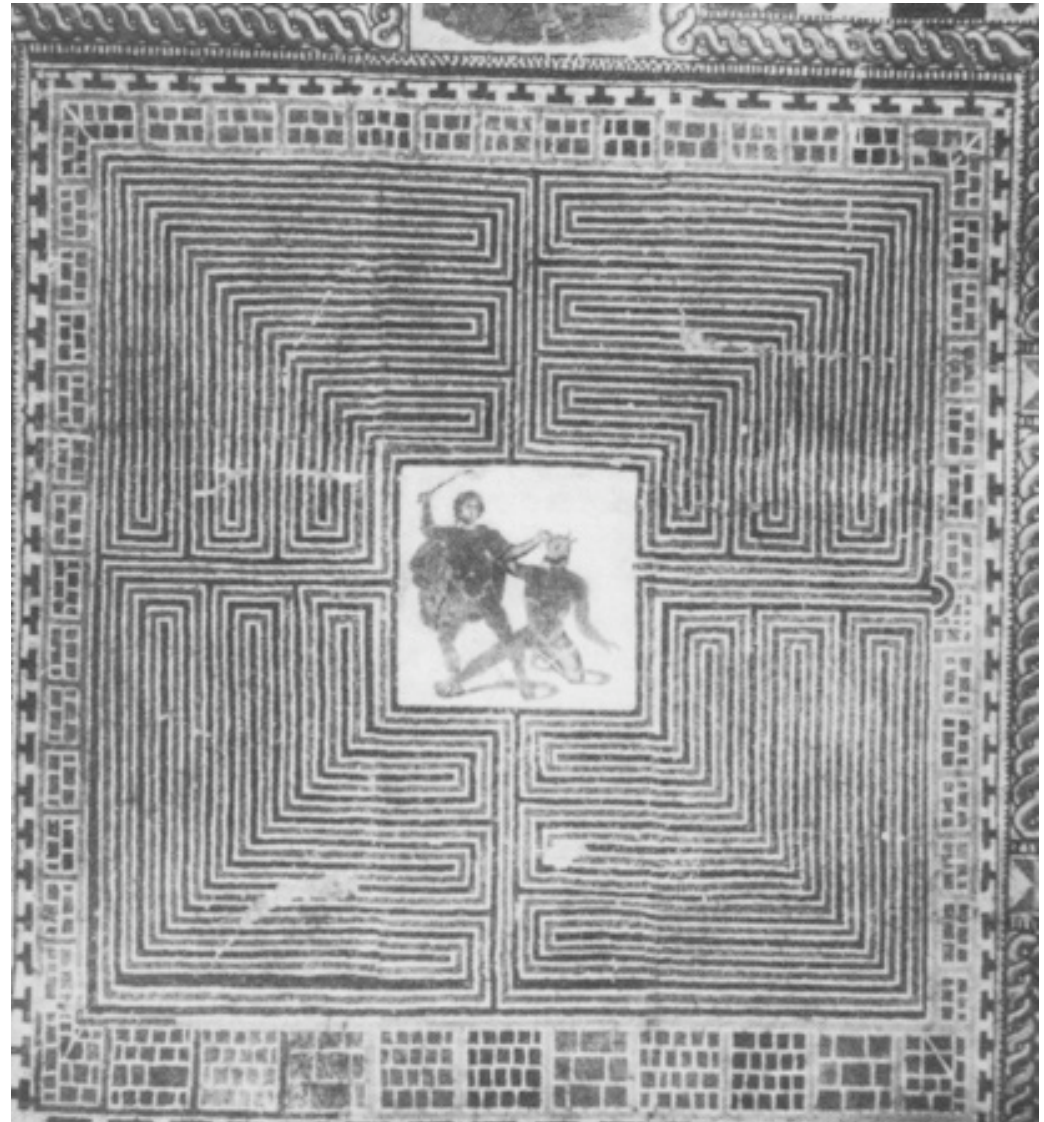
防衛機能、魔除け、異界への扉、
巡礼、中心、聖域、自分自身の内面……etc

Hermann Kern, *Through the Labyrinth*, Prestel, 2000

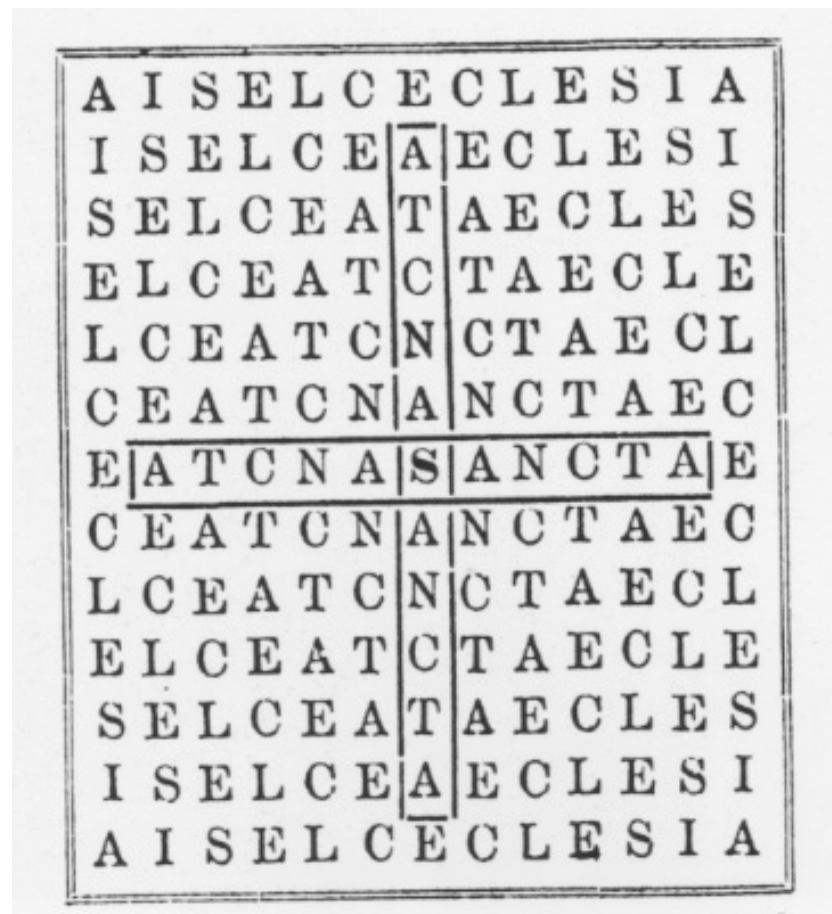
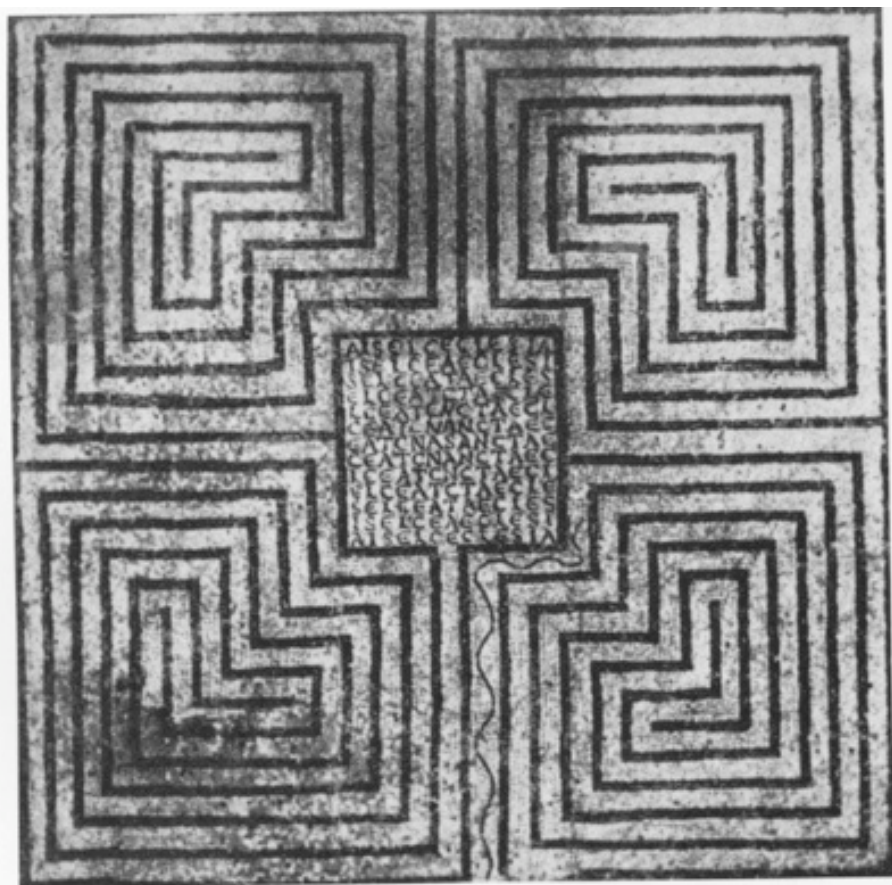
古代（伝承からデザインへ）

ギリシャ神話との
関連（ミノタウロス
とテセウス）

（ローマのモザイク）



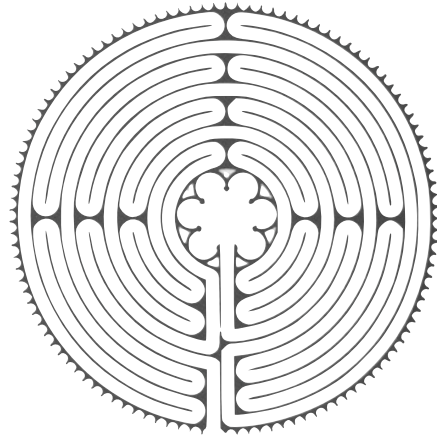
中世：迷宮図像がキリスト教に取り入れられる



(324年、エル・アスナム バジリカ床)

シャルトル大聖堂、身廊床の迷宮（13世紀）

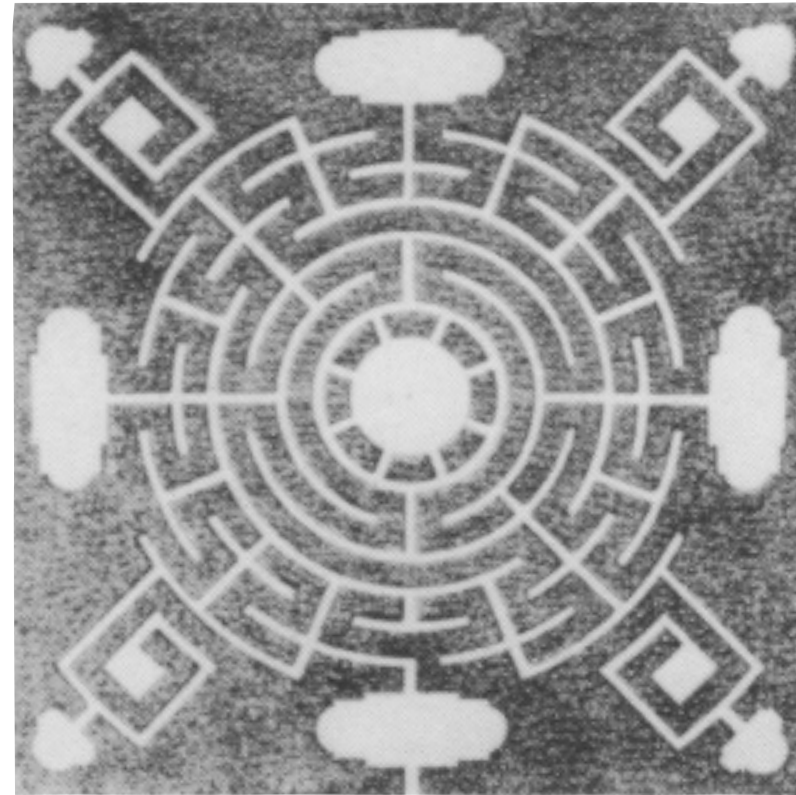
中世において、迷宮は
「エルサレムへの道」
と称されていた（巡礼の代替）



迷宮の通路を歩くことで
靈的な「死と再生」の
疑似体験を行う



近代：世俗化の時代（宗教性や精神性は衰退）



18世紀の庭園迷路／生垣迷路
ガリマール『庭園建築』より

シャルトル型迷宮・その現代の利用事例



迷宮の通路を「歩く」という渦動
中心での瞑想・祈り

Grace Cathedral (San Francisco)



精神療法士・
司教座聖堂参事会員の
Lauren Artress (1945~) が
1991年に主催したイベントで
迷宮の「再発見」がなされた

「ラビリンス・ムーブメント」
が広まるきっかけとなる

(2007年、カーペットから舗床タイプに)



火曜：ヨガ

日曜：聖体拝領

金曜：labyrinth peace
walk

(第2金曜はキャンドル・
音楽などを使用)

Artressによる迷宮図像の解釈

- ・ 潜在性にはたらきかける図像である
- ・ 迷宮の内部では、内的世界がより明瞭なものになる
 - ・ 時間が消失し、忙しない外界と距離を置く
 - ・ 歩くことにより、魂が慰めと平穏を得る
- ・ 迷宮は神のかすかなあらわれへと人々を導く

“the body / mind / Spirit is unified in the labyrinth”

現代の西欧においては、伝統的な価値観や
キリスト教的な世界観・教義・教会制度などの力が
薄れてきており（中心の喪失）
スピリチュアリティが興隆している

迷宮を歩くということ、その中心での祈り
（身体的・霊的な渦動体験）によって
人々は各々「中心」を見出そうとしている

どうもありがとうございました



中世末期
イギリスの「芝迷宮」
Turf Labyrinth